

厚生労働科学研究費補助金
がん対策推進総合研究事業

がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と
指導者教育プログラムの構築に向けた研究

平成 29 年度 総括・分担研究報告書

研究代表者 野澤桂子

平成 30 年 (2018) 3 月

目 次

I . 総括研究報告

- がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの
構築に向けた研究 ----- 1
野澤桂子

II . 分担研究報告

- 1 . アピアランスケア研修会における教育内容の検証・評価に関する研究 ----- 11
飯野京子
- 2 . がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査 ----- 19
野澤桂子
- 3 . 一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化とその対処に関する意識調査 ----- 27
藤間勝子

- III . 研究成果の刊行に関する一覧表 ----- 33

総括研究報告書

がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究

研究代表者	野澤 桂子	国立がん研究センター中央病院 アピアランス支援センター センター長
研究分担者	飯野 京子	国立看護大学校 教授
	藤間 勝子	国立がん研究センター中央病院 アピアランス支援センター臨床心理士
	清水 千佳子	国立がん研究センター中央病院 乳腺・腫瘍内科 医長
	森 文子	国立がん研究センター中央病院 看護部 副看護部長
	八巻 知香子	国立がん研究センターがん対策情報センター がん情報提供部 室長
	菊地 克子	東北大学病院 皮膚科 講師
	全田 貞幹	国立がん研究センター東病院 放射線治療科 医長
	宮本 慎平	国立がん研究センター中央病院 形成外科 科長
研究協力者	上坂 美花	患者代表： CheerWoman チアウーマン第3期、第4期事務局長
	改發 厚	患者代表： 精巣腫瘍患者友の会代表
	岸田 徹	患者代表： NPO 法人がんノート代表理事
	桜井 なおみ	患者代表： 一般社団法人 CSR プロジェクト代表理事
	山崎 多賀子	患者代表： NPO 法人がんリボンズ理事

全がんの5年生存率が上昇し、仕事を持ちながら通院する患者も32.5万人存在する時代となった。しかし、社会活動の増加は、患者に治療に伴う外見の変化を意識させる契機となり、医療の場においても、外見の変化に対する患者支援が強く求められるようになってきている。にもかかわらず、医療者には、アピアランスケアについての正しい知識や公平な情報がなく、また、個々の患者支援のために必要な支援のあり方を学ぶ場もないため、患者指導に困難を感じている状況も明らかになっている。

そこで、本研究は、基礎的な情報や支援方法をeラーニング化して、希望する医療者が学べるようにすること(研究：アピアランスケアに関するeラーニング用基礎教育資料の開発を目指した研究)で、アピアランスケアの標準化及び均てん化を図るとともに、より高度な対応を求められるケースに対処できる指導者の養成(研究：アピアランスケアを行う指導者教育プログラムの構築に向けた研究)を目指すこととした。初年度の29年度は基礎教育内容の検証のための各種実態調査、30年度は試案作成、31年度は実施と評価を中心に研究を実施し、教育プログラム用コンテンツを開発する予定である。

本年度は、平成29年9月末に課題の採択がなされた後、研究プロセスから患者の意見を反映すべきであるとの評価委員の指導を受け、患者会代表ら5名の研究協力者を加えて、研究に着手した。分担研究者及び研究協力者が合議の上、パイロット調査を実施し、その後、平成30年2-3月にかけて、全国がん診療連携拠点病院の医療者に対する質問紙調査744名(回収率36.7%)、がん患者1034名(男性518名、女性516名)と一般人1030名(男性515名・女性515名)に対するインターネット調査を実施して、回答を得た。

医療者を対象とした調査（アピアランスケア研修会における教育内容の検証・評価に関する研究）によれば、医療者は、アピアランスケアを提供する必要があると考えてはいるものの、実際に患者を支援する自信は低く、その多くが正確な知識や適切なスキルを学びたいと考えていた。そのため、地方でのアピアランスケア研修会の開催を希望する声も多く、今後は、支援方法の普及のためにも、e-learning が検討すべき課題であることが示された。

患者を対象とした調査（がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査）では、患者の半数以上が外見の変化を体験しているが、疾患により体験頻度に差があること、性別や年齢により苦痛を感じる程度に差があること、医療者に対する対処方法の情報提供への期待が大きいこと、実際に必要だったにもかかわらず十分に提供がなされなかった情報など、がん患者が直面する状況や支援すべき課題が示された。

一般人を対象とした調査（一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化とその対処に関する意識調査）では、がんによる外見変化として、頭髪の脱毛が広く認知されていた。また、外見の変化により、仕事や学校生活が阻害されると考える人も多く、罹患早期の適切な介入によって社会参加への不安を軽減させる必要が示唆された。そして、若年女性と高齢男性の約 3 割が、外見が変わるならば抗がん剤を用いたくないと答えており、外見変化は治療選択にも大きく影響する可能性も示された。さらに、対処方法の情報は病院から得られると半数以上が考えており、その期待は高い。医療者は情報源として利用希望・信頼度共に高いが、反面、病院が提供するパンフレットや WEB サイトの信頼度は患者団体や患者個人が発信するインターネット情報より低く、情報提供では、単に資料を配布するだけでなく、医療者の介入が必要であると考えられる。

以上の事項に関する本格的な解析は今後の課題である。しかし、医療者・患者・一般人の 3 つの視点からアピアランスケアを捉える本研究により、医療者対象アピアランスケアの研修教育内容を検討するに際しての、基礎資料になりうる貴重なデータを収集することができた。

A. 研究目的

1. 背景

がんの治療法や有害事象緩和技術の進歩、入院期間の短縮化、外来治療環境の整備などにより、社会と接点をもちながら治療を行う患者が増加し、現在、就労を継続しているがん患者は 32.5 万人と報告されている（厚生労働省, 2013）。しかし、手術療法、放射線療法、薬物療法などの治療に伴う外見の変化は患者に大きな苦痛をもたらす、患者の 97% が「病院で外見に関する情報を提供して欲しい」と望んでいた（Nozawa et al, 2013）。このように、外見の変化に対する患者の苦痛が高く、支援が強く求められている時代において、外見のケア（アピアランスケア）は、医療者が備えておくべき支持療法の一つであるといえよう。

ものではないために軽視され、医療者は、乏しい科学的根拠や情報、個人的な経験に基づく処置や指導を行ってきたに過ぎない。実際、本研究者が既に実施した 7 研究からは、抗癌剤添付文書の副作用に関する記載さえも系統立っておらず、インターネット上には医学的根拠のない、または有害なケア情報が 40% も氾濫し、医療者が患者指導に困難を感じている状況が明らかになった。そこで、本研究からは、初めて多分野の研究者と協働して、「ガイドライン作成手続きに則り、「がん患者に対するアピアランスケアの手引き 2016 年度版」を上梓した。この手引きによれば、「推奨度 B：科学的根拠があり勧められる」は 5 肢（50CQ）しかなく、多くの医療者が患者に提供している企業経由の情報には根拠がなかった。医療者は、患者指導に際して、このような状況を踏まえなければならない。

にもかかわらず、長い間、外見の変化は致命的な

また、本研究からは、2012 年度より、がん診療

連携拠点病院 397 施設の医療者向けにアピアランスケア研修会を行い、延べ 1114 名に対する教育を行ってきた。しかし、2017 年度の研修会は、参加者の募集開始から 30 分で満席となり、患者の支援ニーズを実感している現場医療者の希望に、全く対応できていない状況にある。

平成 29 年 10 月に設定された第 3 期「がん対策推進基本計画」（厚生労働省、2017）では、「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」を目指すための個別課題として、「がん患者等の就労を含めた社会的な問題（サバイバーシップ支援）」が示されている。そして、そのための具体的な課題の 1 つに、がん治療に対する外見（アピアランス）の変化（爪、皮膚障害、脱毛等）が提示され、今後「国は、がん患者の更なる QOL の向上を目指し、医療従事者を対象としたアピアランス支援研修等の開催」等を推進してゆくという方向性が示された。この計画では、「がん対策」に初めて「アピアランス」という用語が明記され、今後は、医療者が行うアピアランスケアの標準化及び均てん化を図ることが求められている。

上記のような状況をふまえると、アピアランスケアについては、基礎的な情報や支援方法を e ラーニング化して、希望する医療者が学べるようにすることにより、その標準化及び均てん化を図るとともに、より高度な対応を求められるケースに対処できる指導者の養成が急務である。

2. 目的

本研究の目的は、がん患者のサバイバーシップを支援するため、アピアランスケアの質を担保して基礎教育の均てん化を図り（研究 ），その指導者となる医療者教育プログラムを構築する（研究 ）ことにある。そして、これらの研究により、がん患者のアピアランスケアの提供体制モデルを作成する。

いずれの研究も、29 年度は各種実態調査による教育内容の検証、30 年度は試案作成、31 年度は実施と評価を中心に研究を遂行する。

研究 Ⅰ：アピアランスケアに関する e ラーニング用基礎教育資料の開発

教育資料は、アピアランスケアの手引きの開発をはじめとする、本研究グループが中心となって実施してきた先行研究の結果に、新たに患者及び医療者、一般人を対象としたニーズ調査の結果を加味して内容を構成する。そのため、以下の A・B・C 研究を行い、教育内容を検証するための基礎データを得る。

研究 Ⅰ-A（医療者対象調査）：アピアランスケア研修会における教育内容の検証・評価に関する研究
現在、アピアランス支援について医療従事者がどのような支援に必要性を感じ、どのような内容を実施しているか、その自信などの実態を明らかにする。

研究 Ⅰ-B（患者対象調査）：がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査
がん患者を対象に、外見変化によって直面する社会的困難の実態（種々の外見変化の有無、社会活動への影響、実際に行った対処方法）と情報・支援ニーズ（必要とした情報、医療者に期待する内容、適切な情報提供方法等）を明らかにする。

研究 Ⅰ-C（一般人対象調査）：一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化とその対処に関する意識調査
がんに罹患したことのない一般人を対象に、がんによる外見変化についてどのような知識やイメージを持っているのかを調査する。

がんに罹患以前の外見変化についての知識・イメージを明らかにすることで、実際にがんに伴う外見変化への対処が必要となった時の行動や必要な支援方法を予測することが可能になり、罹患初期の適切な情報提供に活かすことができる。

研究 Ⅱ：アピアランスケアを行う指導者教育プログラムの構築

過去に国立がん研究センター中央病院主催のアピアランスケア研修会を修了した医療者に対して教育プログラムの振り返り調査を実行し、現場で不足する教育内容を明らかにする。
（本年度の基礎データの収集は、研究 Ⅰ-A に含めて行うため、以下の記述は省略する。）

B. 研究方法

研究 : アピアランスケアに関する e ラーニング
用基礎教育資料の開発

研究 -A (医療者対象調査) : アピアランスケア
研修会における教育内容の検証・評価に関する研究

1. 対象

アピアランス支援に専門的に関わっていると考
えられる以下の対象者

- 1) 全国がん診療連携拠点病院における看護師 400
施設×5 名
国立がん研究センターアピアランスケア研修受
講生 (研究 用) も含む。
- 2) アピアランス支援に興味のある者のグループで
開設している「アピアランスケア研究ネットワー
ク」HP に任意にアクセスし、期間中に申し込ん
だ看護師、社会福祉士、心理士等の医療従事者

2. 調査項目

先行研究をベースに調査案を作成して、がん専門
病院においてがん看護経験 8 年以上の看護師 8 名
によるパイロットスタディを行い、専門家会議で検
討し作成した。

- (1) 対象者の背景を問う項目
- (2) 研修会の方法を検討するための項目
・臨床において実施しているアピアランス支援内容
・医療従事者がアピアランスケアを実施する必要性
や自信
・アピアランス支援に対する考え方
・過去にアピアランス支援研修会に参加した経験を
問う項目
・研修プログラムの提供方法を検討するための項目

3. 調査方法

郵送法による自記式質問紙調査

- 1) 全国がん診療連携拠点病院の看護部門の管理者
宛に、郵送により質問紙を配布するよう依頼する。
調査対象候補者は依頼文を読み、同意した場合に
記入し、同封の封筒を用いて研究者へ返信を依頼
する。
- 2) 「アピアランスケア研究ネットワーク」の HP
にアクセスし、ホームページ上にある研究協力依
頼文書を読み、調査に任意にて同意する場合、同

HP 上に返信先を登録し、その宛先に研究者が同
意説明文書と質問紙を郵送した。

研究 -B (患者対象調査) : がん治療に伴う外見
の変化とその対処に関する実態調査

1. 対象

以下の適格要件を全て満たす患者 1000 名

- (1) 20 歳以上 75 歳未満の男女
- (2) がんの診断が臨床的もしくは組織学的に確認
されている者 (ただし自己申告による)
- (3) 現在、がん治療を受けている患者もしくは現在
は治療が終了し経過観察中の者
- (4) 本研究への参加同意が得られ、インターネット
デバイスに関する操作に問題のない者

2. 調査項目

- (1) 対象者の個人属性
- (2) 治療に伴う外見変化や身体症状の実態に関す
る項目
- (3) 外見変化への対処の実際に関する項目
- (4) 外見変化が日常生活や社会性におよぼす影響
に関する項目
- (5) 外見変化に関する情報提供に関する項目
- (6) ウィッグ購入に関する項目
- (7) 外見変化へのアドバイスに関する項目
- (8) 治療中に受けた美容ケアに関する項目
- (9) がんに対する一般的な対処行動に関する項目

3. 調査方法

まず、本調査に先立ち選定したインターネット調
査会社に調査協力登録を行っているモニターを対
象に、がん患者の抽出を目的としたスクリーニング
調査を実施し、適格基準に該当するがん患者を抽出
する。その際、可能な限りがん患者の男女別部位別
罹患率 (最新がん統計 2017) に比例するよう、本
調査対象候補者を無作為抽出する。次に、調査用紙
の全項目を回答した有効回答だけを累計して割付
通りの対象者数が 1000 名に達した時点で調査を
終了する。

研究 -C (一般人対象調査) : 一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化とその対処に関する意識調査

1. 対象

適格基準

- (1) 国内に居住する 20 歳以上 75 歳未満の男女 1000 名
- (2) がん罹患した経験のない者
- (3) 本研究への参加同意が得られ、インターネットデバイスに関する操作に問題のない者

除外基準

現在または過去にがん治療に携わったことがある医療者や製薬会社の関係者

2. 調査項目

- (1) がん治療による外見変化の認知
- (2) 認知のきっかけとなった対象
- (3) がん患者の生活イメージ
- (4) 外見に関する症状についての知識
- (5) 外見以外の身体症状に関する知識
- (6) 外見変化の対処に関する項目
- (7) 変化に伴う生活変容に関する項目
- (8) 外見変化の対処に利用する情報源に関する項目
- (9) 外見変化の対処に利用する情報源の信頼度
- (10) がん患者が利用するウィッグ価格
- (11) 自分が購入する場合のウィッグ価格
- (12) 個人属性：性別, 年齢, 居住地域, 学歴,

3. 調査方法

スクリーニング調査によって抽出され一般人に対して、インターネットを通じ、事前に設定した調査項目を一斉発信して回答を求めた。

20 才代・30 才代・40 才代・50 才代・60-74 才各年代性別ごとに 10%になるよう、無作為に割り付けられた。

C. 研究結果

研究-A (医療者対象調査) : アピアランスケア研修会における教育内容の検証・評価に関する研究

1. 対象者の属性

2025 名に質問紙を送付し、744 名 (36.7%) より回答を得た。分析対象者は 736 名 (36.3%) であった。対象者の所属施設は、720 名 (98.6%) ががん診療連携拠点病院であり、46 都道府県に所在していた。

対象者の概要は、平均年齢 42.5 歳 (24-62 歳)、職種は、看護師が 724 名 (98.8%) と大多数であり、その他、社会福祉士 2 名、心理士 3 名、薬剤師 1 名等であった。国立がん研究センターにおけるアピアランスケア研修会参加経験者は、175 名 (23.8%) であった。

2. 医療者が行うアピアランス支援

アピアランス支援について医療職が行う必要性について、6 段階の回答のうち「とてもある」が 398 名 (54.1%)、「ある」が 288 名 (39.2%) であった。しかし、医療者としての適切な支援の自信については、「とてもある」が 11 名 (1.5%)、「ある」が 96 名 (13.0%) であった。この結果から、90% 以上の対象者は、医療者がアピアランス支援を行う必要性を認識していること、一方で、対象者は適切な支援に関する自信は低いと認識していることが示された。アピアランス支援の e-learning 研修については、669 名 (92.8%) の対象者が受講を希望していた。

その他、今後、詳細に分析する予定である。

研究 -B (患者対象調査) : がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査

1. 対象者の属性

1034 名 (男性 518 名、女性 516 名) 平均年齢 58.66 才 (26 才 - 74 才)。疾患は、大腸がん 162 名・胃がん 152 名・乳がん 120 名・肺がん 115 名・前立腺がん 76 名・子宮がん 36 名・肝臓がん 29 名・その他 344 名であった。

2.1. 治療に伴う外見の変化

がんの治療によって外見が変化した人は全体の58.1%。性別では女性が69.2%で男性より多く、疾患別では「乳がん」で92.5%の患者が外見の変化を体験していた。男性で最も多かったのは「肺がん」54.4%であった。

2.2. 外見の変化による日常生活への影響

外見の変化による日常生活への影響に関しては、図2の通りである。「治療中でも外見や自分の格好に気を遣う余裕があった」(51.1%)人が約半数いる一方で、仕事に影響が出た人(34.7%)も少なくなかった。また、43.1%の人が周りの人から「かわいそう」だと思われたくないと考えていた。

2.3. 医療者からの情報提供

外見変化の対処方法に関する情報提供を医療者から受けることに関して、実際に何らかの外見の変化を体験した人(594名)は、「とても良いと思う」(52.2%)、「どちらかといえば良いと思う」(43.3%)、と95.5%の患者が医療者による情報提供を肯定していた。

2.4. 外見変化に関して知りたい情報

実際に必要であったにもかかわらず十分に得られなかった情報として多かったのは、「職場や学校へ復帰する時の対処方法」(18.8%)、「スキンケアの方法」(16.9%)、「周囲の人への外見変化についての説明方法」(16.8%)、「爪障害への対処方法」(16.4%)、「爪障害の予防方法」(16.2%)であった。

その他、今後、詳細分析予定である。

研究 -C (一般人対象調査)：一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化とその対処に関する意識調査

1. 対象者の属性

1030名(男性515名・女性515名)

2.1. がんによる外見変化の認知について

一般人の49.2%は外見変化した患者を見たことがあ

ると回答したが、性差があり女性が53.2%で男性の45.2%を上回った。また、きっかけは年代によって異なり、全体では「家族」36.1%と「TVなどメディアで見る芸能人・スポーツ選手」33.7%が上位であった。

2.2. 外見変化の症状

「ほとんどの患者が経験する」外見変化として回答された項目は、「血色が悪くなる」58.2%「頭髮の脱毛」56.8%「痩せて体型が変わる」53.8%が上位であった。一方、下位は「爪がとれる」11.5%、「太って体型が変わる」7.5%であった。

2.3. 具体的な外見変化への対処方法

問いに対し「そう思う」と回答した比率が高い項目は、「治療中は敏感肌や低刺激用のスキンケア製品を使った方がよい」61.8%、「治療中や再発毛後はパーマやヘアカラーをしない方がよい」59.2%、「がんによる外見変化については、病院で対処方法の説明がある」55.1%であった。

2.4. 自分に外見変化が生じたと仮定した場合の行動

問いに対し「そう思う」を選択した比率の多い項目は、「外出や人と会うのがおっくうになる」39.6%、「仕事や学校を、辞めたり休んだりしなければならない」37.4%、「治療中は副作用で体調が悪く、外見変化があっても、外見や自分の恰好に気を遣う余裕はない」25.4%であった。

一方、設問に対し「そうは思わない」を選択した比率が多い項目は、「外見が変わっても気にしないと思う」31.9%、「脱毛したり外見が変わったりするならば、抗がん剤治療はしたくない」15.5%、「外見が変わったことでは日常生活に変化はない」14.7%であった。

2.5. 外見変化の対処に利用するだろうと思う情報源

75.9%の人が「医療者」を選択しており、次いで「同じ病気の個人で発信するインターネット上の情報」43.3%、「患者会など患者支援団体が発信するインターネット上の

情報」42.5%であった。

その他，今後，詳細に分析する予定である。

D. 考察

研究 -A (医療者対象調査) : アピアランスケア
研修会における教育内容の検証・評価に関する研究

本調査は，全国の都道府県のがん診療連携拠点病院において，アピアランス支援を担っている看護師を中心に 700 名を超える方から得られた貴重なデータである。

アピアランス支援について医療者が提供する必要があるものの，提供する自信が低く，今後，支援方法の普及のためにも，e-learning を検討すべき課題であることが示された。

研究 -B (患者対象調査) : がん治療に伴う外見
の変化とその対処に関する実態調査

患者の半数以上が外見の変化を体験しているが，疾患により体験頻度に差があること，性別や年齢により苦痛を感じる程度にさがあること，医療者に対する対処方法の情報提供への期待が大きいこと，実際に必要だったにもかかわらず十分に提供がなされなかった情報などが示された。

研究 -C (一般人対象調査) : 一般人を対象とした
がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する
意識調査

外見変化としては頭髪の脱毛が高く認知されていた。また仕事や学校生活が阻害されると考える人も多く，適切な介入で社会参加への不安を軽減させる必要が示唆された。若年女性と高齢男性の約 3 割が，外見が変わるならば抗がん剤をしたくないと答えており，外見変化は治療選択にも影響する可能性も示された。

対処方法の情報は病院から得られると半数以上が考えており，その期待は高い。医療者は情報源として利用希望・信頼度共に高いが，反面，パンフレットやWEBサイトの信頼度は患者団体や患者個人が発信するインターネット情報より低く，情報提供では，単に資料を配布するだけでなく医療者の介入が必要だと考えられた。

E. 結論

本格的な分析はこれからであるが，患者，一般人，医療者を対象とした本研究により，今後の医療者対象アピアランスケアの教育内容の検討に際して基礎資料になりうる貴重なデータを収集することができた。

がん患者を対象とした調査により，がん患者が直面する課題に明確に応え得るように研修内容を構築することができる。とりわけ，一般人のもつがんや外見変化に対する偏見を含む意識も調査できたことから，初期段階での有意義な介入ができるように，研修内容に反映させ得る。そして，今後，それらと医療者の自信や不安，現状での知識を総合的に分析することで，非常に有意義な研修プログラムを作成することができる。

文献

1. Flexen, J., Ghazali, N., Lowe, D., & Rogers, S. N. (2012). Identifying appearance -related concerns in routine follow-up clinics following treatment for oral and oropharyngeal cancer. *Br J Oral Maxillofac Surg*, 50(4), 314-320.
2. 大坊郁夫 (2001). 化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動 (Vol. 9): 北大路書房.
3. Nozawa, K., Shimizu, C., Kakimoto, M. et al. (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. *Psychooncology*, 22(9), 2140-2147.
4. Nozawa K., Tomita M., Takahashi E., Toma S., Arai Y., Takahashi M. (2017) Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients *Jpn J Clin Oncol* 1-8. DOI: <https://doi.org/10.1093/jjco/hyx069> Published: 08 June 2017
5. 鈴木公啓・飯野京子・嶋津多恵子・佐川美枝子・綿貫成明・市川智里・栗原美穂・坂本はと恵・栗原陽子・上杉英生・野澤桂子・矢澤美香子・

藤間勝子,がん化学療法を受ける患者への脱毛
や爪の変化に関する情報提供の内容と方法
東京未来大学研究紀要 Vol.10 2017.3
pp.87 - 95

6. Nozawa, K., Ichimura, M., Oshima, A., Tokunaga, E., Masuda, N., Kitano, A., et al. The present state and perception of young women with breast cancer towards breast reconstructive surgery. *Int J Clin Oncol.* : 20, Issue 2 (2015), Page 324-33
7. 藤間勝子, 野澤桂子, 清水千佳子. 化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造国立病院看護研究学会誌 巻: 11号: 1 ページ: 13-20, 2015年
8. 厚生労働省(2016), 事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン, <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11200000-Roudoukijunkyouku/0000115300.pdf>, (2017年12月2日確認)
9. 光井武夫編(2001), 新化粧品学 第2版.p.5, 南山堂, 東京.
10. 飯野京子, 嶋津多恵子, 佐川美枝子, 綿貫成明, 市川智里, 栗原美穂, 上杉英生, 栗原陽子, 坂本はと恵, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 長岡波子(2017), がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア: がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから, *Palliative Care Research*, 12(3), 709-715.
11. 佐川美枝子, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 市川智里, 栗原美穂, 坂本はと恵, 栗原陽子, 上杉英生, 飯野京子, 嶋津多恵子, 綿貫成明(2016), がん患者の外見変化に対するケアの実践報告, 国立看護大学校研究紀要, 15(1):p.26-29.
12. 総務省(1990), 日本標準商品分類(総務省統計局平成2年), 中分類88化粧品, 歯磨き, 石鹸, 家庭用合成洗剤及び家庭用化学製品の分類, http://www.soumu.go.jp/main_content/000294494.pdf

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- (1) Keiko Nozawa, Makiko Tomita, Eriko Takahashi, Shoko Toma, Yasuaki Arai, Miyako Takahashi: Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients, *Jpn J Clin Oncol*, 1 - 8, 2017, [Epub ahead of print]
- (2) 野澤桂子: 医療者が行うがん患者の外見支援の意義, 日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌 12(1), 1 - 8, 2017
- (3) 菊地克子: 皮膚の健康科学最前線 皮膚科における化粧品の役割, 日本化粧品学会誌41巻4号, 282 - 285, 2017
- (4) 菊地克子: 機能からみた外来患者へのスキンケア指導 化学療法による副作用を減らすスキンケア、生活指導, *Derma* 259号, 22 - 50, 2017
- (5) 全田貞幹: 特集 / 頭頸部悪性腫瘍の疑問に答える, *JOHNS(Journal of Otolaryngology, Head and Neck Surgery)* 33巻9号, 1264, 2017
- (6) 藤間勝子: がん患者に対するアピアランスケアの意義(解説), *血液内科*74巻4号, 551 - 556, 2017
- (7) 飯野京子, 嶋津多恵子, 佐川美枝子, 綿貫成明, 市川智里, 栗原美穂, 上杉英生, 栗原陽子, 坂本はと恵, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 長岡波子: 全著がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから, *Palliative Care Research*12(3), 709-715, 2017
- (8) 飯野京子, 長岡波子, 劔物祐子, 亀岡智美, 小澤三枝子, 上國料美香, 水野正之, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 田村やよひ: 看護職員の教育上の課題と課題解決のために活用したい院外研修への期待 政策医療を担う医療機関の看護部長の認識, 国立病院看護研究学会誌13(1), 55-65, 2017
- (9) 小澤三枝子, 水野正之, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 上國料美香, 飯野京子, 劔物祐子, 田村やよひ, 亀岡智美: 看護師長を対象とした継続教育プログラムの検討 政策医療を担う病院に勤務する看護師長の教育ニード・学習ニード調査から, 国立病院看護研究学会誌13(1), 10-17, 2017

(10) 亀岡智美, 上國料美香, 飯野京子, 小澤三枝子, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 田村やよひ: 看護部教育委員の学習ニードと特性の関係 政策医療を担う医療機関を対象にして, 国立病院看護研究学会誌13(1), 2-9, 2017

(11) 村上真基, 大石恵子, 綿貫成明, 飯野京子: 緩和ケア病棟を併設している療養病棟における緩和ケアに対する意識調査 緩和ケア病棟スタッフと療養病棟スタッフへの意識調査, Palliative Care Research12(3), 285-295, 2017

2. 学会発表

(1) 中川栄美, 野澤桂子 他: がん治療に伴う皮膚変化に対応するカモフラージュファンデーションの研究, 第 81 回 SCCJ 研究検討会, 2017.11.29, 東京

(2) 関根 広, 野澤桂子 他: 放射線治療による皮膚反応の定性的評価は定量的評価と一致するか, 日本放射線腫瘍学会第 30 回学術大会, 2017.11.18, 大阪

(3) 野澤桂子, 藤間勝子: がん患者のアピアランスケアに関する医療者教育研修会の現状と課題について, 国立病院総合医学会, 2017.11.11, 神奈川

(4) 野澤桂子: アピアランス支援の意義とエビデンス, 第 13 回日本乳がん看護研究会, 2017.10.21, 東京

(5) 野澤桂子: 大腸がん化学療法とアピアランスケア~患者の生きるを支援する~, 第 55 回日本癌治療学会学術集会, 2017.10.20, 横浜

(6) 野澤桂子: 「肺癌患者のアピアランスケア」忘れてませんか、栄養・リハビリ・外見の問題, 日本肺癌学会, 2017.10.14, 横浜

(7) 野澤桂子: アピアランスケア-癌治療に伴う毛髪の変化と患者支援-, 日本化粧品学会, 2017.10.12, 東京

(8) 野澤桂子: 看護師に求められるアピアランスケア, 第 14 回日本乳癌学会中部地方会, 2017.9.9, 飯田市

(9) 野澤桂子: 肺癌患者のアピアランスケアについて考える, 第 106 回日本肺癌学会関西支部学術集会, 2017.6.24, 大阪

(10) 藤間勝子, 野澤桂子: 手術により容貌変化した上顎洞悪性黒色腫患者に対するアピアランス支援の一例, 第 22 回日本緩和医療学会学術大会, 2017.6.24, 横浜

(11) 野澤桂子: 化粧・整容療法 認知症・老化による機能的・外見的变化への対応「癌治療に伴う外見の変化とアピアランスケア」, 第 28 回日本老年歯科医学会学術大会, 2017.6.15, 名古屋

(12) 長岡波子, 飯野京子, 藤澤雄太, 小田幸司, 柿本英明, 成田綾子, 水谷奈緒子: 看護基礎教育におけるがん看護教育の取り組み, 第 15 回国立病院看護研究学会学術集会, 2017.12, 東京

(13) 長岡波子, 飯野京子, 刃物祐子, 亀岡智美, 小澤三枝子, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 上國料美香, 田村やよひ: 政策医療を担う医療機関の看護部長が認識している看護職員の教育上の課題, 第 71 回国立病院総合医学会, 2017.11, 高松

(14) 飯野京子, 綿貫成明, 長岡波子, 栗原美穂, 渡辺由美: 「それぞれの癌」超高齢社会の癌治療ー理想と現実 がん治療を受ける高齢患者の課題と QOL を高める看護ー 食道がん術後回復プログラムの開発, 日本癌治療学会学術集会, 2017.10, 神奈川

(15) 花出正美, 小野桂子, 林美子, 井上さよ子, 飯野京子, 細矢美紀, 關本翌子, 小野智子, 中山祐紀子: 「がんを知って歩む会」の新規立ち上げ 運営に関する医療者のニーズと課題, 第 23 回日本緩和医療学会学術集会, 2017.6, 横浜

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし

厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学研究費がん対策推進総合事業)
 がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究
 (H29-がん対策-一般-027) 代表者：野澤桂子 分担研究報告書

アピアランスケア研修会における教育内容の検証・評価に 関する研究

研究分担者	飯野京子	国立看護大学校
研究協力者	長岡波子	国立看護大学校
	綿貫成明	国立看護大学校
	嶋津多恵子	国立看護大学校
	佐川美枝子	国立看護大学校
	野澤桂子	国立がん研究センター中央病院 アピアランス支援センター
	藤間勝子	国立がん研究センター中央病院 アピアランス支援センター
	森 文子	国立がん研究センター中央病院 看護部
	清水千佳子	国立国際医療研究センター 乳腺腫瘍内科
	清水弥生	四国がんセンター看護部

本研究班は、国立がん研究センターにおいて実施している、アピアランス支援研修に関する教育内容の検証・評価および今後の e-learning コンテンツ開発を目的に研究に取り組んだ。平成 29 年度の研究課題は、「がん治療を受ける患者に対するアピアランス支援の現状と支援に対する自信～医療従事者のための e-learning 研修プログラム作成に向けて～」と題し、医療従事者のアピアランス支援の実態を調査した。調査内容は、現在、アピアランス支援について医療従事者がどのような支援に必要性を感じ、どのような内容を実施しているか、その自信などの実態を明らかにすることであり、全国がん診療連携拠点病院に従事する看護職およびアピアランスケア研究ネットワーク HP にアクセスし登録した者を対象とした。拠点病院 400 施設等に 2,025 通調査票を配布し、744 名(36.7%)より回答を得、分析対象者は 736 名(36.3%)であった。対象者の所属施設は、720 名(98.5%)ががん診療連携拠点病院であり、46 都道府県に所在していた。国立がん研究センターにおけるアピアランスケア研修会参加者は、175 名(23.8%)であった。アピアランス支援について医療者は必要を高く認識していたが、提供する自信が低いという結果であった。

調査結果は、全国の多様ながん診療連携拠点病院より得られ、今後のアピアランス支援内容の検討および全国の普及のための基礎資料となりうる貴重なデータである。今後、詳細な分析を行い学術集会および論文として公表する予定である。

A. 研究目的

1. 研究の目的及び意義

がんの治療法や有害事象の緩和技術の進歩、入院の短期化、外来治療の進歩などにより、治療と仕事の継続、社会的な役割を担うがん患者が増加しており、現在、就労を継続しているがん患者は 32.5 万人と報告されている(厚生労働省, 2016)。

がんの主要な治療である手術療法、放射線療法、薬物療法を受ける患者にとって、治療に伴う外見の変化は避けられず、社会で活動する患者の外見変化への支援(以下、アピアランス支援)ニーズは高い(Nozawa et al, 2013)。

研究協力者らは、2012 年度より、がん診療連携拠点病院の医療従事者向けにアピアランス支援研

修会を行い、逐次、研修内容の改善を図ってきている。

平成 29 年 10 月に提示された第 3 期「がん対策推進基本計画」（厚生労働省，2017）では、「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」を目指すための個別課題として、「がん患者等の就労を含めた社会的な問題（サバイバーシップ支援）」が示された。それを可能とするための具体的な課題の 1 つに、がん治療に対する外見（アピアランス）の変化（爪、皮膚障害、脱毛等）が提示され、今後「国は、がん患者の更なる QOL の向上を目指し、医療従事者を対象としたアピアランス支援研修等の開催」等を推進していく方向性が示された。

今回、「がん対策推進基本計画」に初めて『アピアランス』という用語が明記されたことから、アピアランス支援の標準化及び均てん化を図るとともに、より高度な対応を求められるケースに対処できる医療従事者の養成が急務であると考えている。そこで、本研究班では、研修を希望する医療従事者がより多く学べるような支援体制を構築する必要があると考えた。

今回の研究では、現在、アピアランス支援について医療従事者がどのような支援に必要性を感じ、どのような内容を実施しているか、その自信などの実態を明らかにすることを目指す。この結果をふまえ、医療従事者が実施する必要のあるアピアランス支援内容を精選し、現在行っている研修プログラムを見直し、基礎的な情報や支援方法を網羅した e-learning プログラムの開発を目指す。

B. 研究方法

1. 活動の経過

2017 年

10 月：分担研究者の研究班を組織

11-12 月：文献検討、研究の検討会、パイロットスタディ実施（がん専門病院においてがん看護経験 8 年以上の看護師 8 名）後、計画書案完成

12 月：アピアランスケア研究ネットワークの設立と HP の開設

12 月 18 日：分担研究者の所属する「国立研究開発法人国立国際医療研究センター倫理委員会」に研究計画の審査を申請

2018 年

2 月 9 日：倫理委員会の承認を得る。

（NCGM-G-002433-00）

2 月 20 日：調査票発送、

3 月末まで調査票の返信

4 月中旬入力終了

今後、詳細な分析予定

2. 研究報告

研究課題：「がん治療を受ける患者に対するアピアランス支援の現状と支援に対する自信～医療従事者のための e-learning 研修プログラム作成に向けて～」

2.1. 研究デザイン

横断研究、自記式質問紙調査

2.2. 研究対象者

アピアランス支援に専門的に関わっていると考えられる以下の対象者を設定した。

1) 全国のがん診療連携拠点病院の実態を調査するため、全がん診療連携拠点病院における看護師 400 施設×5 名を対象者とした。

国立がん研究センターアピアランスケア研修受講生に優先的に調査票配布を依頼。

2) アピアランス支援に興味のある者のグループで開設している「アピアランスケア研究ネットワーク」HP に任意にアクセスし、期間中に申し込んだ者を対象とする。看護師、社会福祉士、心理士が回答すると想定された。

2.3. 調査方法

郵送法による自記式質問紙調査であり、以下の 2 通りとした。

1) 全国がん診療連携拠点病院の看護部門の管理者宛に、郵送により質問紙を配布するよう依頼し、調査対象候補者は依頼文を読み、同意した場合に記入し、同封の封筒を用いて研究者へ返信を依頼した。

2) 「アピアランスケア研究ネットワーク」の HP にアクセスし、ホームページ上にある研究協力依頼文書を読み、調査に任意にて同意する場合、同 HP 上に返信先を登録し、その宛先に研究者が同意説明文書と質問紙を郵送した。調査対象候補者は依頼文を読み、同意した場合にアンケートを記入し、同封の封筒を用いて研究者へ返信を依頼した。

2.4. 調査内容

調査内容は、これまで研究班で実施してきた調査研究結果（佐川ら，2016；飯野ら，2017）および薬機法に基づく化粧品の分類および、香粧品の分類、日本標準商品分類の中分類 88 化粧品、歯磨き、石鹸、家庭用合成洗剤及び家庭用化学製品の分類（総務省，1990）、がん患者に対するアピアランスケアの手引き 2016 年度版および文献検討をふまえ、調査案を作成した。

その調査案をがん専門病院においてがん看護経験 8 年以上の看護師 8 名によるパイロットスタディを経て修正し、専門家会議で検討し作成した。

2.4.1. 対象者の背景を問う項目

対象者の年齢、性別、臨床経験年数、資格、所属部門、アピアランス支援研修受講歴、所属施設のがん診療連携拠点病院の有無/所属施設の都道府県、所属施設のアピアランス支援者、支援提供部門

2.4.2 研修会の方法を検討するための項目

1) 臨床において実施しているアピアランス支援内容について：脱毛・多毛等、爪の変化、皮膚の変化、手術による外見の変化と区分し、多重回答の回答形式とした。

2) 医療従事者がアピアランスケアを実施する必要性・自信を問う 35 項目を設定した。必要性について回答形式は、「全く必要でない」を 1、「とても必要」を 5 のリッカートとした。実施する自信は、「全くない」を 1、「とてもある」を 5 のリッカートとした。

3) アピアランス支援に対する考え方について、医療従事者が行う必要性、医療従事者の立場で適切に提供できているか、どのような職種が関わることが望ましいかを問う設問を設定し、択一式の回答形式とした。

4) 過去にアピアランス支援研修会に参加した経験を問う項目を設定した。また、応用編の受講生に対しては、研修会の講義内容に追加してほしい内容について、自由回答式で回答を求めた。

5) 研修プログラムの提供方法を検討するための項目として、アピアランスケアに関する情報源、e-learning に関する項目を設定した。回答形式は、択一式、多重回答式とした。

アピアランスケア研究ネットワーク
Appearance Care Research Network

トップページ Top

調査ご協力のお願い Information

活動実績 Report

事務局 Contact

リンク Links

がん治療を受ける患者に対するアピアランス（外見）支援の現状や課題を調査し、研修プログラムの開発を行います。

調査へのご協力をありがとうございました

「がん治療を受ける患者に対するアピアランス支援の現状と支援に対する自信～医療従事者のための e-learning 研修プログラム作成に向けて～」に関する調査へのご協力をありがとうございました。なお、調査への参加を申し込まれた方の調査票は、3月19日（月）必着締切となっております。どうぞよろしくお願致します。

※ 詳細はこちら

活動実績

アピアランス研究ネットワークの概要と、これまでの活動実績、研究論文発表、学会発表を紹介します。

※ 詳細はこちら

リンク

アピアランス支援の研究に関連するサイトを掲載しています。

※ 詳細はこちら

ロゴマーク

オレンジクローバーは癌患者さんを支えるハートの象徴です。国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センターのシンボルマークです。

ご案内

アピアランスケア研究ネットワークでは、がん治療を受ける患者に対するアピアランス（外見）支援の現状や課題を明らかにし、ケア提供者の研修プログラムの開発に向けた調査を今後行う予定です。この研究は、厚生労働科学研究費がん対策推進総合事業「がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究（H29-がん対策一般-027 代表者：野澤桂子）によって行います。

「自分らしくいること 元気でいるコツ！」

アピアランスケア研究ネットワーク

連絡先: ap.kenkyu(at)を半角の@に

Copyright © 2017 Appearance Care Research Network. All Rights Reserved.

図1. アピアランスケア研究ネットワークのホームページ
<http://ap-kenkyu.umin.jp/>

< アピランス支援内容の調査項目 >

相談を受けたり、説明したり、具体的に行っているアピランス支援内容

脱毛・多毛等について	
1. 脱毛のプロセスとケア(6 項目)	
頭髪	2.ウィッグ(8 項目)
	3.ウィッグ以外の対応(3 項目)
	4.頭髪・頭皮ケア(8 項目)
	5.頭髪の装い(4 項目)
睫毛・眉毛	6.つけ睫毛(4 項目)
	7.つけ睫毛以外の対処(7 項目)
	8.眉毛(4 項目)
	9.その他(2 項目)
10.その他体毛の説明・相談 a. 鼻毛 b. 髭 c. 腋毛 d. 陰毛	
爪の変化について	
1.変化のプロセスと種類(13 項目)	
2.変化の予防と対処、装い、ケア用品の選択・使用方法(13 項目)	
皮膚の変化について	
1.変化のプロセスと種類(13 項目)	
2.変化の予防と対処、装い、ケア用品の選択・使用方法(8 項目)	
手術による外見の変化について	
1.乳房切除術について(5 項目)	
2.頭頸部手術について(4 項目)	
3.その他(2 項目)	

医療者が実施する「必要性」と「自信」

1.頭髪・睫毛・眉毛の変化に関する情報提供、手技の説明など(6 項目)
2.爪の変化に関する情報提供、手技の説明など(3 項目)
3.皮膚の変化に関する情報提供、手技の説明など(3 項目)

4.手術に伴う変化に関する情報提供、手技の説明など(3 項目)
5.外見変化の部位等に関わらず共通支援内容 アピランス支援に関する意向の確認、アセスメント、セルフケア行動の確認、企業との連携、根拠に基づいたケアなど(20 項目)

医療者が実施するアピランス支援の考え

1. 医療者が行う必要性
2. 医療者として適切に実施できる自信
3. どの職種が支援を行うべきか

アピランス支援研修会への参加

1. 国立がん研究センター主催研修
2. それ以外の研究(4 項目)
3. 受講したことはない
* 国立がん研究センター研修応用編参加者対象に、講義内容の追加項目の希望自由記述

アピランス支援に困ったときの情報源

1. 書籍 がん患者に対するアピランスケアの手引き 2016 年版(ガイドライン研究班)
2. 他のマニュアル、書籍(2 項目)
3. 医師・看護師等(6 項目)
4. その他(7 項目)

アピランス支援に関する e-learning

1. 受講希望
2. 使用デバイス

アピランス支援や支援のための研修についての意見や要望の自由記述

2.5. 分析方法

選択式回答については、各項目の記述統計量を算出し、対象属性との関係に関する推量統計(t検定、カイ二乗検定など)を行う。

自由回答については、質的にまとめる。

2.6. 倫理面への配慮

「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」(平成 29 年 2 月 29 日一部改定)に則り、研究計画を立案した。調査は要配慮個人情報を取得しない、無記名直筆式の質問紙調査であり、調査対象候補者に依頼文により目的・方法等を説明した。同意は、アンケートの調査協力の欄にチェックを入れることを持って確認した。同意説明文書には、本研究に参加するか否かは被験者の自由意思に基づいて決定して良いこと、一旦研究参加に同意し返信後は、無記名であり、同意の撤回はできないことなどを記載した。また、本研究成果は、厚生労働科学研究助成金報告書および学術雑誌への投稿と、関連学会学術集会での発表などの形で公表することを明記した。

研究は、国立国際医療研究センター倫理委員会の承認を得たうえで開始した。

(NCGM-G-001811-00)

C. 研究結果

2018 年 2 月に、がん診療連携拠点病院に従事する看護職およびアピアランスケア研究ネットワーク HP へのアクセス登録者 2,025 名を対象に、質問紙を発送した。3 月末に回収を終了し、4 月上旬に入力を終了した。詳細な分析は今後の予定であるが、概要は以下の通りである。

< 研究結果の概要 >

744 名(36.7%)より回答を得、分析対象者は 736 名(36.3%)であった。対象者の所属施設は、720 名(98.6%)ががん診療連携拠点病院であり、46 都道府県に所在していた。対象者の概要は、平均年齢 42.5 歳(24-62 歳)、職種は、看護師が 724 名(98.8%)と大多数であり、その他、社会福祉士 2 名、心理士 3 名、薬剤師 1 名等であった。国立がん研究センターにおけるアピアランスケア研修会参加経験者は、175 名(23.8%)であった。

表 1 対象者の属性

		(N=736)	
		n (%)	mean (SD)
がん診療連携拠点病院	はい	720(98.5)	
	いいえ	11(1.5)	
地域	北海道・東北	144(19.6)	
	関東甲信越	204(27.8)	
	東海・北陸	110(15.0)	
	近畿	81(11.0)	
	中国・四国	68(9.3)	
	九州・沖縄	127(17.3)	
性別	男性	18 (2.5)	
	女性	715(97.5)	
年齢	20 歳代	28(3.9)	
	30 歳代	224(31.1)	42.5
	40 歳代	346(48.0)	(7.3) 歳
	50 歳以上	123(17.1)	
看護師経験年数	10 年未満	63 (8.6)	
	10 15 年未満	136(18.6)	19.3
	15 20 年未満	198(27.1)	(7.7) 年
	20-25 年未満	155(21.2)	
	25-30 年未満	100 (13.7)	
	30 年以上	79(10.8)	
資格	看護師	726 (98.6)	
	認定看護師	362 (49.2)	
	専門看護師	45 (6.1)	
	社会福祉士	2 (0.3)	
	心理士	3 (0.4)	
	薬剤師	1 (0.1)	
所属	通院治療センター	262(35.6)	
	病棟	199(27.0)	
	外来診療部門	132(17.9)	
	がん相談支援センター	81(11.0)	
	その他	102(13.8)	
	アピアランス支援部門	ある	170(23.4)
今後開設予定		15(2.1)	
ない		540(74.5)	

アピアランス支援について医療職が行う必要性について、6段階の回答のうち「とてもある」が398名(54.1%)、「ある」が288名(39.2%)であった。しかし、医療者としての適切な支援の自信については、「とてもある」が11名(1.5%)、「ある」が96名(13.0%)であった。この結果から、90%

以上の対象者は、医療者がアピアランス支援を行う必要性を認識していること、一方で、対象者は適切な支援に関する自信は低いと認識していることが示された。アピアランス支援の e-learning 研修については、669名(92.8%)の対象者が受講を希望していた。

その他、今後、詳細分析予定である。

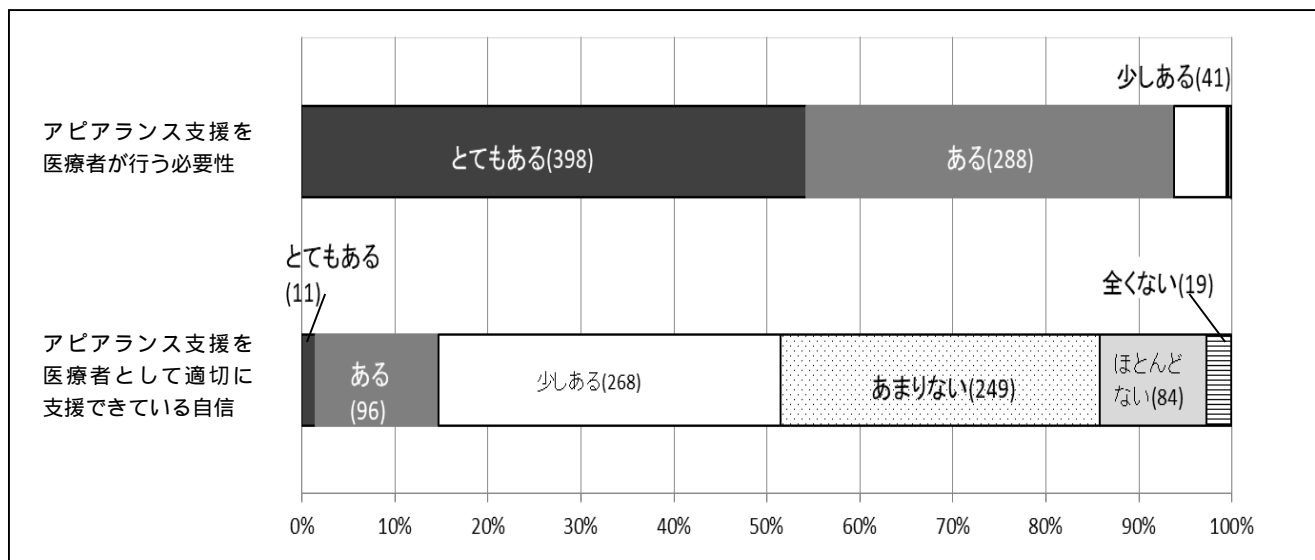


図2：アピアランス支援を医療者が行う必要性と自信

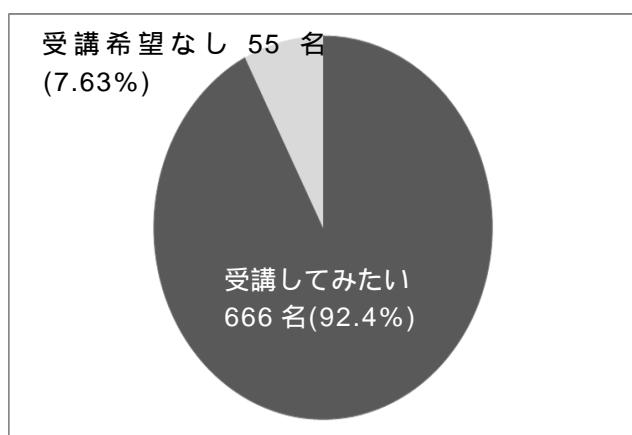


図3：アピアランス支援 e-learning 研修受講希望

D. 考察

本調査は、全国の都道府県のがん診療連携拠点病院において、アピアランス支援を担っている看護師を中心に700名を超える方からの回答が得られた。研究成果は今後のアピアランス支援内容の検討および全国の普及のための基礎資料となりうる貴重なデータである。

結果から、アピアランス支援について医療者が提供する必要があるものの、提供する自信が低く、今後、支援方法の普及のためにも、e-learning を検討すべき課題であることが示された。

今後、項目別に課題である内容など詳細に分析し、研修プログラムの構築の資料とすると共に、論文として投稿する予定である。

E. 結論

アピアランス支援の実態および支援の必要性、支援の自信、国立がん研究センターにおけるアピアランス支援研修受講生の評価などの分析をふまえ、提言していきたい。

文献

厚生労働省(2016), 事業場における治療と職業生活の両立支援のためのガイドライン, <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-11200000-Roudoukijunkyouku/0000115300.pdf>, (2017年12月2日確認)

光井武夫編(2001), 新化粧品学 第2版.p.5, 南山堂, 東京.

飯野京子, 嶋津多恵子, 佐川美枝子, 綿貫成明, 市川智里, 栗原美穂, 上杉英生, 栗原陽子, 坂本はと恵, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 長岡波子(2017), がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア: がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから, *Palliative Care Research*, 12(3), 709-715.

Nozawa K, Shimizu C, Kakimoto M, Mizota Y, Yamamoto S, Takahashi Y, Ito A, Izumi H, Fujiwara Y(2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. *Psychooncology*, 22(9):2140-7.

佐川美枝子, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 市川智里, 栗原美穂, 坂本はと恵, 栗原陽子, 上杉英生, 飯野京子, 嶋津多恵子, 綿貫成明(2016), がん患者の外見変化に対するケアの実践報告, 国立看護大学校研究紀要 15(1), p.26-29.

総務省(1990), 日本標準商品分類(総務省統計局平成2年), 中分類 88 化粧品, 歯磨き, 石鹸, 家庭用合成洗剤及び家庭用化学製品の分類, http://www.soumu.go.jp/main_content/000294494.pdf

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

<論文発表>

(1) 飯野京子, 嶋津多恵子, 佐川美枝子, 綿貫成明, 市川智里, 栗原美穂, 上杉英生, 栗原陽子, 坂本はと恵, 稲村直子, 杉澤亜紀子, 宮田貴美子, 長岡波子: 全著がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから, *Palliative Care Research*12(3), 709-715, 2017

(2) 飯野京子, 長岡波子, 劔物祐子, 亀岡智美, 小澤三枝子, 上國料美香, 水野正之, 木村弘江, 原田

久美子, 大柴福子, 田村やよひ: 看護職員の教育上の課題と課題解決のために活用したい院外研修への期待 政策医療を担う医療機関の看護部長の認識, *国立病院看護研究学会誌*13(1), 55-65, 2017
(3) 小澤三枝子, 水野正之, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 上國料美香, 飯野京子, 劔物祐子, 田村やよひ, 亀岡智美: 看護師長を対象とした継続教育プログラムの検討 政策医療を担う病院に勤務する看護師長の教育ニード・学習ニード調査から, *国立病院看護研究学会誌*13(1), 10-17, 2017
(4) 亀岡智美, 上國料美香, 飯野京子, 小澤三枝子, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 田村やよひ: 看護部教育委員の学習ニードと特性の関係 政策医療を担う医療機関を対象にして, *国立病院看護研究学会誌*13(1), 2-9, 2017

(5) 村上真基, 大石恵子, 綿貫成明, 飯野京子: 緩和ケア病棟を併設している療養病棟における緩和ケアに対する意識調査 緩和ケア病棟スタッフと療養病棟スタッフへの意識調査, *Palliative Care Research*12(3), 285-295, 2017

<学会発表>

(1) 長岡波子, 飯野京子, 藤澤雄太, 小田幸司, 柿本英明, 成田綾子, 水谷奈緒子: 看護基礎教育におけるがん看護教育の取り組み, 第15回国立病院看護研究学会学術集会, 2017.12, 東京

(2) 長岡波子, 飯野京子, 劔物祐子, 亀岡智美, 小澤三枝子, 木村弘江, 原田久美子, 大柴福子, 上國料美香, 田村やよひ: 政策医療を担う医療機関の看護部長が認識している看護職員の教育上の課題, 第71回国立病院総合医学会, 2017.11, 高松

(3) 飯野京子, 綿貫成明, 長岡波子, 栗原美穂, 渡辺由美: 「それぞれの癌」超高齢社会の癌治療 — 理想と現実 がん治療を受ける高齢患者の課題とQOLを高める看護 — 食道がん術後回復プログラムの開発, 日本癌治療学会学術集会, 2017.10, 神奈川

(4) 花出正美, 小野桂子, 林美子, 井上さよ子, 飯野京子, 細矢美紀, 關本翌子, 小野智子, 中山祐紀子: 「がんを知って歩む会」の新規立ち上げ運営に関する医療者のニーズと課題, 第23回日本緩和医療学会学術集会, 2017.6, 横浜

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし

厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学研究費がん対策推進総合事業)

がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究

(H29-がん対策-一般-027) 代表者: 野澤桂子

分担研究報告書

がん治療に伴う外見の変化とその対処に関する実態調査

分担研究者	野澤 桂子	国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター
研究協力者	藤間 勝子	国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター
	清水 千佳子	国立国際医療研究センター病院 乳腺腫瘍内科
	上坂 美花	患者代表: CheerWoman チアウーマン第3期、第4期事務局長
	改發 厚	患者代表: 精巣腫瘍患者友の会
	岸田 徹	患者代表: NPO 法人がんノート
	桜井 なおみ	患者代表: 一般社団法人 CSR プロジェクト
	山崎 多賀子	患者代表: NPO 法人キャンサーリボンズ

がん患者を対象に、外見変化によって直面する社会的困難の実態(種々の外見変化の有無、社会活動への影響、実際に行った対処方法)と情報・支援ニーズ(必要とした情報、医療者に期待する内容、適切な情報提供方法等)を明らかにすることを目的に、インターネットによる調査を実施した。

有効回答 1034 名(男性 518 名、女性 516 名)、対象者の平均年齢は 58.66±10.64 歳(27-74 歳)であった。疾患部位は、大腸がん 162 名・胃がん 152 名・乳がん 120 名・肺がん 115 名・前立腺がん 76 名・子宮がん 36 名・肝臓がん 29 名・その他 344 名であった。全体の 58.1%が、治療に伴う外見の変化を体験し、それにより外出や仕事が妨げられた患者も少なくなかった。また、医療者が外見変化の対処方法に関する情報提供を行うことに関して、実際に外見の変化を体験した患者の 95.5%が、肯定的に評価していた。このように、医療者提供の対処情報に対する期待や、信頼度が高い反面、実際に必要であったにもかかわらず十分に情報が得られなかったことも明らかになった。

本研究結果は、今後の医療者対象アピアランスケアの教育内容の検討に際して基礎資料になりうる貴重なデータである。継続して詳細な分析を行い、学会等で公表するとともに、研修内容に反映させる予定である。

A. 研究目的

1. 背景

がんの治療法や有害事象緩和技術の進歩、入院期間の短縮化、外来治療環境の整備などにより、就労の継続など、社会と接点をもちながら治療を行う患者が増加している。第3期がん対策推進基本計画の

「尊厳を持って安心して暮らせる社会の構築」実現のためにも、今や外見のケア(アピアランスケア)は、医療者が備えておくべき支持療法の一つといえよう。

にもかかわらず、長い間、外見の変化は致命的なものではないために軽視され、医療者は、乏しい科学的根拠や情報、個人的な経験に基づく処置や指導

を行ってきた。実際、本研究者が既に実施した7つの研究からは、抗癌剤添付文書の副作用に関する記載さえも系統立っておらず、インターネット上には医学的根拠のない、または有害なケア情報が40%も氾濫していること、医療者が患者指導に困難を感じている状況が明らかになった。

また、本研究者は、2012年度より、がん診療連携拠点病院397施設の医療者向けにアピアランスケア研修会を行い、延べ1114名に対する教育を行ってきた。しかし、2017年度は研修会参加者の募集開始から30分で満席となり、患者の支援ニーズを実感している現場医療者の希望に、全く対応できていない状況にある。

今後は、医療者が行うアピアランスケアの標準化及び均てん化を図ることが求められ、そのための研修内容を再構築する必要に迫られている。

確かに、これまでも、その研修内容を構築するための基礎データとなりうる外見の変化に対する研究は、いくつか行われてきた。しかし、例えば、男性(Nozawa et al, 2017)や乳がん患者(Nozawa et al, 2015; 藤間ほか, 2015)のように対象を限定したものであったり、全癌種を対象とした2009年の調査(Nozawa et al, 2013)からは8年が経過しているなど、従来の研究は現状を反映しているものではなかった。実際、当時と比較して分子標的治療の増加や免疫療法の登場など、治療状況が変化しているだけでなく、政策的に就労支援が推進されるなど、ここ数年で患者をとりまく社会状況も大きく変化している。

そこで、医療者のアピアランスケアの質を担保する教育プログラムを構築し、がん患者のアピアランスケアの提供体制モデルを作成するために、新たな基礎データを得る必要がある。

2. 目的

がん患者を対象に、外見変化によって直面する社会的困難の実態(種々の外見変化の有無、社会活動への影響、実際に行った対処方法)と情報・支援ニーズ(必要とした情報、医療者に期待する内容、適切な情報提供方法等)を明らかにする。

B. 研究方法

1. 研究デザイン 横断的調査研究

2. 研究対象者

以下の適格要件を全て満たす患者1000名

- (1) 20歳以上75歳未満の男女
- (2) がんの診断が臨床的もしくは組織学的に確認されている者(ただし自己申告による)
- (3) 現在、がん治療を受けている患者もしくは現在は治療が終了し経過観察中の者
- (4) 本研究への参加同意が得られ、インターネットデバイスに関する操作に問題のない者

・対象者数設定の根拠

患者の外見変化とその対処の実態を把握するという目的のため、特定のがん種に対象者を限定しない。しかし、結果の解析ではがん種の違いによる検討をするため、回答をグループ化して分析を行えるよう約1,000件のデータが必要となると見積もった。

3. 方法

3.1. 調査方法

スクリーニング調査によって抽出されたがん患者に対して、インターネットを通じ、事前に設定した調査項目を一斉発信して回答を求める。

3.2. 手順

本研究では、医療者向け教育資料を開発するために、がん患者のアピアランス問題に対する対処法や意識等について幅広く把握するという目的を達成する上で、インターネット調査の手法を用いることが有効であると判断した。

インターネット調査を実施するにあたり、日本マーケティングリサーチ協会に加盟しているインターネット調査会社から、モニターに関する公開資料を参考に、登録属性の著しい偏りや登録情報の更新頻度を研究者間で点検し、インターネット調査会社を選定した。

調査手順は次の通りである。まず、本調査に先立ち選定したインターネット調査会社に調査協力の登録をしているモニターを対象に、がん患者の抽出を目的としたスクリーニング調査を、インターネットを通じて行う。スクリーニング調査では、年齢およびがん罹患の有無(治療終了後の場合を含む)を

問い、適格基準(1)-(4)に該当するがん患者を抽出する。その際、可能な限りがんの男女別部位別罹患率(平成 2012 年度の新罹患患者数:最新がん統計 2017)に比例するように、本調査対象候補者を無作為抽出する。調査用紙の全項目を回答した有効回答だけを累計して割付通りの対象者数が 1000 名に達した時点で調査を終了する。

3.3.調査期間

国立がん研究センター倫理審査委員会による研究許可日(平成 30 年 2 月 21 日)から 2 ヶ月。目標達成人数により、若干日の増減が見込まれる。

3.4.調査項目

先行研究(Nozawa, K. et al.,2013;K.Nozawa et al.,2017;鈴木公啓ら,2017)および予備研究の結果をもとに、医師 1 名・臨床心理士 2 名・美容専門家 2 名・患者会代表 4 名で検討のうえ、以下の質問項目を作成した。

(1) 対象者の個人属性

年齢、性別、居住地、罹患したがん種、学歴、職業

(2) 治療に伴う外見変化や身体症状の実態に関する項目

- ・外見変化の経験の有無(1 項目)
- ・外見変化の体験の有無とその苦痛度(29 項目)
- ・外見変化以外の身体症状の体験有無とその苦痛度(26 項目)

(3) 外見変化への対処の実際に関する項目

- ・外見変化への対処の経験(25 項目)
- ・外見変化への対処に伴う日常整容の変化(5 項目)

(4) 外見変化が日常生活や社会性におよぼす影響に関する項目

- ・外見変化による日常生活や人間関係の変容(13 項目)

(5) 外見変化に関する情報提供に関する項目

- ・外見変化に関する医療者からの説明の有無(1 項目)
- ・外見変化に関する医療者からの説明の判りやすさ(1 項目)
- ・外見変化に関する医療者からの情報提供の量(1 項目)
- ・外見変化に関する医療者からの説明の満足度(1 項目)
- ・外見変化に関する医療者からの情報提供の必要性

(1 項目)

・外見変化に関する情報提供者の信頼度と実際の利用状況(24 項目)

・外見変化の対処方法として必要な情報と獲得の有無(13 項目)

(6) ウィッグ購入に関する項目

購入の有無・購入回数・購入価格

(7) 外見変化へのアドバイスに関する項目

- ・医療者からのアドバイスに関する項目(1 項目)
- ・その他、有意義なアドバイスや役立たなかったアドバイス(5 項目)

(8) 治療中に受けた美容ケアに関する項目

- ・トラブルの有無と内容(2 項目)

(9) がんに対する一般的な対処行動に関する項目(1 項目選択)

3.5.主要な統計学的考察

- ・各変数の度数分布、記述統計の算出を行う。
- ・がん種と外見変化への対処、日常生活への影響、情報の獲得状況、外見変化への対処として必要な情報、必要な情報やケアのニーズ等の関連性を検討するための統計的解析(相関係数の算出、T 検定、分散分析等)を行う。
- ・外見変化の体験・苦痛度と日常生活や社会性の変容についての統計的解析(相関係数の算出、T 検定、分散分析等)を行う。

3.6.倫理面への配慮

本研究は、国立がん研究センター研究倫理委員会の承認を得て実施された。なお、本研究は匿名で実施され、対象者の氏名住所などの個人情報扱わないものとする。

また、本研究における調査は、介入なしの観察研究であり、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に則れば必ずしもインフォームド・コンセントは必要ではない。しかし、改訂個人情報保護法への対応として、次の手続きをもって調査の趣旨説明を行い、対象者の同意を取得した。

本研究の調査実施に先立ち、対象者がアクセスした最初の画面に研究趣旨説明書を提示して説明を行った。画面には、目的、方法、予想される利益と副作用、プライバシーの保護、研究への参加が自由意思によるものであること等を説明し、回答した内容が研究者に研究目的で譲渡されることを明記した。その上で、解答画面の最初にチェックボックス

を作り,そこにチェックをすることで対象者の同意を得た。

C. 研究結果

調査期間は,2018年3月2日~3月22日であった。詳細な分析は今後の予定であるが,概要は,以下の通りである。

1. 回答数

がん患者 1034 名 (男性 518 名,女性 516 名) から回答を得た。

2. 対象者の属性

平均年齢 58.66 才 (26 才 - 74 才)。その他の対象者の属性は表 1 の通りである。

		n (%)
性別	男性	518(50.0)
	女性	516(50.0)
疾患部位	胃	93(9.0)
	男性	
	大腸	80(7.7)
	肺	79(7.6)
	前立腺	76(7.4)
	肝臓	29(2.8)
	その他	161(15.6)
女性	乳房	120(11.6)
	大腸	82(7.9)
	胃	59(5.7)
	肺	36(3.5)
	子宮	36(3.5)
	その他	183(17.7)

職業	公務員	24(2.3)
	経営者・役員	20(1.9)
	会社員(事務系)	103(10.0)
	会社員(技術系)	56(5.4)
	会社員(その他)	64(6.2)
	自営業	54(5.2)
	自由業	27(2.6)
	専業主婦	229(22.1)
	パート・アルバイト	127(12.3)
	その他	54(5.2)
最終学歴	無職	276(26.7)
	中学校	34(23.2)
	高校	325(31.4)
	専門・専修学校	103(10.0)
	短大・高専	146(14.1)
地域	大学・大学院	426(41.2)
	北海道	55(5.3)
	東北	69(6.7)
	関東	375(36.3)
	中部	151(14.6)
	近畿	224(21.7)
	中国	49(4.7)
	四国	20(1.9)
九州	91(8.8)	

3. 外見変化の有無

がんの治療によって外見が変化した人は全体の58.1%。性別では女性が69.2%で男性より多く、疾患別では「乳がん」で92.5%の患者が外見の変化を体験していた。男性で最も多かったのは「肺がん」54.4%であった。図1に示す。

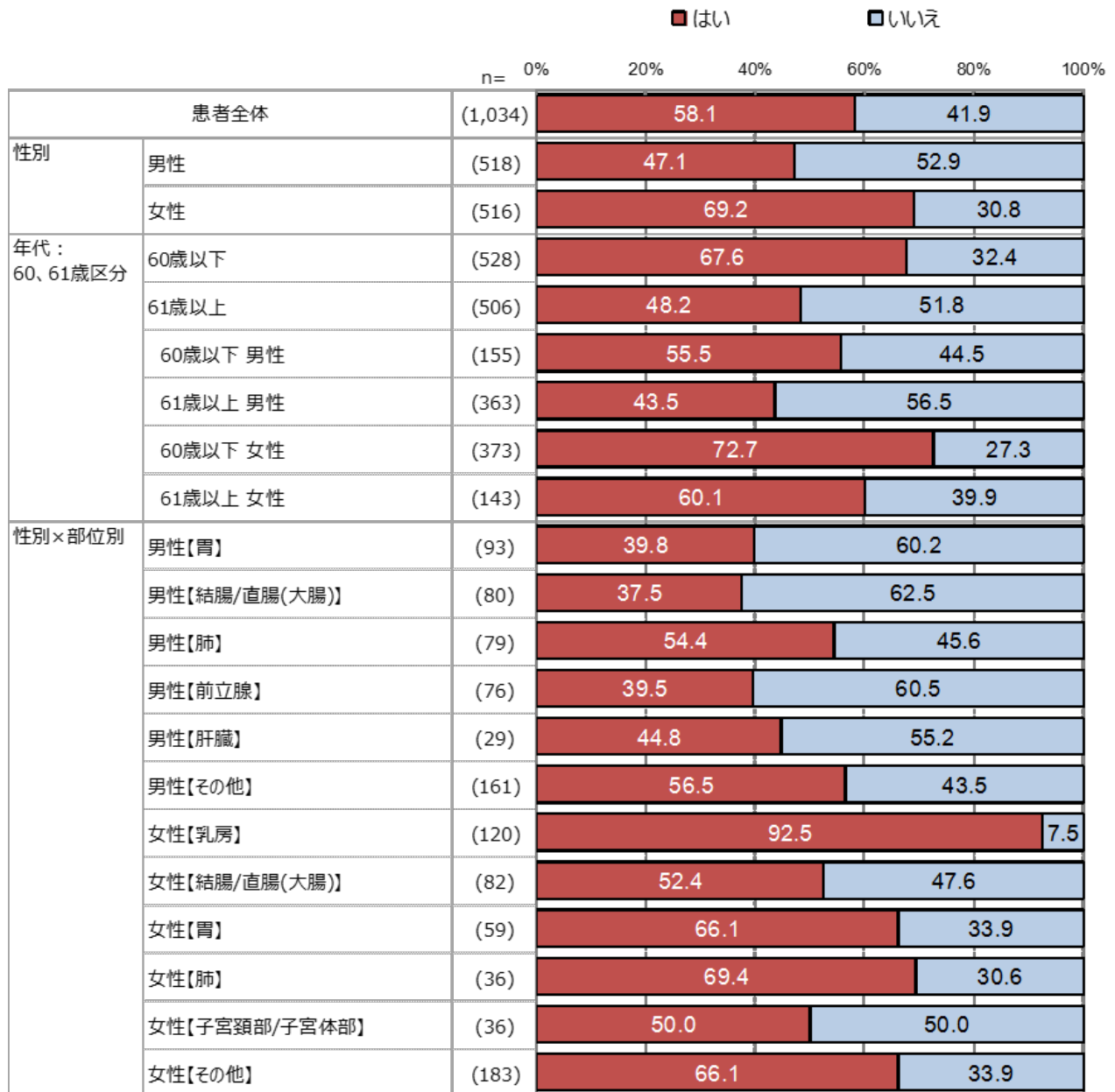


図1. 外見変化を体験した患者の割合

4. 外見の変化による日常生活への影響

外見の変化による日常生活への影響に関しては、図2の通りである。「治療中でも外見や自分の格好に気を遣う余裕があった」(51.1%)人が約半数いる一方で、仕事に影響が出た人(34.7%)も少なくなかった。また、43.1%の人が周りの人から「かわいそう」だと思われたくないと考えていた。

図2に示す。

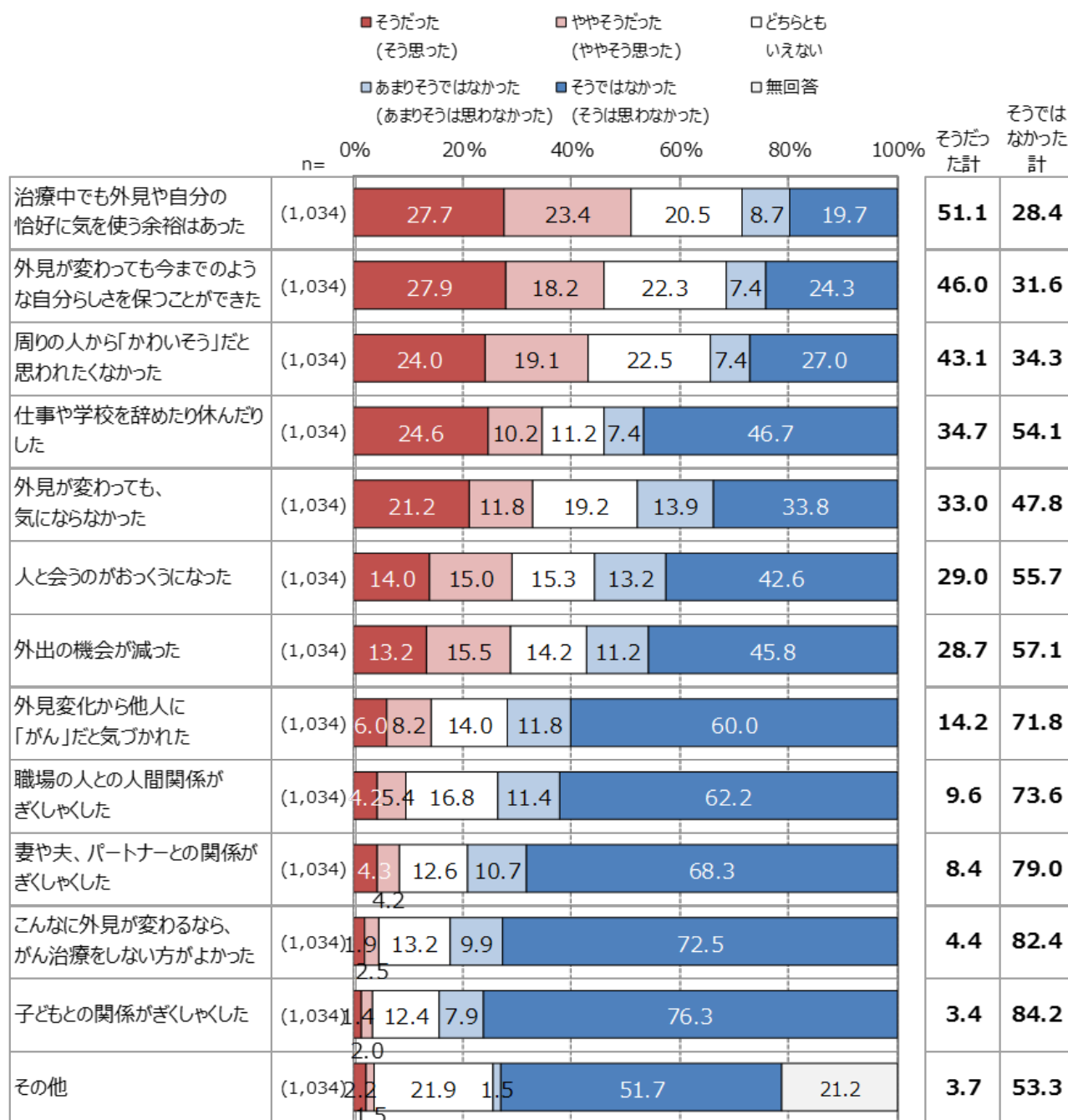


図2. 外見の変化による日常生活への影響

5. 医療者からの情報提供

外見変化の対処方法に関する情報提供を医療者から受けることに関して、実際に何らかの外見の変化を体験した人(594名)は、「とても良いと思う」(52.2%)、「どちらかといえば良いと思う」(43.3%)、と95.5%の患者が医療者からの情報提供を肯定していた。

6. 外見変化に関して知りたい情報

実際に必要であったにもかかわらず十分に得られなかった情報として多かったのは、「職場や学校へ復帰する時の対処方法」(18.8%)、「スキンケアの方法」(16.9%)、「周囲の人への外見変化についての説明方法」(16.8%)、「爪障害への対処方法」(16.4%)、「爪障害の予防方法」(16.2%)であった。

その他、今後、詳細に分析する予定である。

D. 考察

本調査は、インターネットにアクセスできる患者という点でのバイアスは否めない。しかし、部位別罹患率を反映した全国のがん患者1035名から回答を得ることができた。

結果から、患者の半数以上が外見の変化を体験しているが、疾患により体験頻度に差があること、性別や年齢により苦痛を感じる程度にさがあること、医療者に対する対処方法の情報提供への期待が大きいこと、実際に必要だったにもかかわらず十分に提供されなかった情報などが示された。いずれも今後の医療者への教育プログラムを作成するにあたって必要な、基礎資料となり得る貴重なデータである。

今後、より詳細に内容を分析し、検討しながら研修プログラムに反映させてゆく予定である。

E. 結論

今後の分析の中で検討する。

文献

1. Flexen, J., Ghazali, N., Lowe, D., & Rogers, S. N. (2012). Identifying appearance-related concerns in routine follow-up clinics following treatment for oral and oropharyngeal cancer. *Br J Oral Maxillofac Surg*, 50(4), 314-320.
2. 大坊郁夫 (2001). 化粧行動の社会心理学：化粧する人間のこころと行動 (Vol. 9): 北大路書房.
3. Nozawa, K., Shimizu, C., Kakimoto, M. et al. (2013). Quantitative assessment of appearance changes and related distress in cancer patients. *Psychooncology*, 22(9), 2140-2147.
4. Nozawa K., Tomita M., Takahashi E., Toma S., Arai Y., Takahashi M. (2017) Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients *Jpn J Clin Oncol* 1-8. DOI: <https://doi.org/10.1093/jjco/hyx069> Published: 08 June 2017
5. 鈴木公啓・飯野京子・嶋津多恵子・佐川美枝子・綿貫成明・市川智里・栗原美穂・坂本はと恵・栗原陽子・上杉英生・野澤桂子・矢澤美香子・藤間勝子, がん化学療法を受ける患者への脱毛や爪の変化に関する情報提供の内容と方法 東京未来大学研究紀要 Vol.10 2017.3 pp.87 - 95

6. Nozawa, K., Ichimura, M., Oshima, A., Tokunaga, E., Masuda, N., Kitano, A., et al. The present state and perception of young women with breast cancer towards breast reconstructive surgery. *Int J Clin Oncol.* : 20, Issue 2 (2015), Page 324-33
7. 藤間勝子, 野澤桂子, 清水千佳子. 化学療法により乳がん患者が体験する外見の変化とその対処行動の構造国立病院看護研究学会誌 巻:11 号:1 ページ:13-20,2015年

F. 健康危険情報 なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- (1) Keiko Nozawa, Makiko Tomita, Eriko Takahashi, Shoko Toma, Yasuaki Arai, Miyako Takahashi : Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients, *Jpn J Clin Oncol*, 1 - 8, 2017, [Epub ahead of print]
- (2) 野澤桂子: 医療者が行うがん患者の外見支援の意義, *日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌* 12(1), 1 - 8, 2017

2. 学会発表

- (1) 中川栄美, 野澤桂子 他: がん治療に伴う皮膚変化に対応するカモフラージュファンデーションの研究, 第81回 SCCJ 研究検討会, 2017.11.29, 東京
- (2) 関根 広, 野澤桂子 他: 放射線治療による皮膚反応の定性的評価は定量的評価と一致するか, *日本放射線腫瘍学会* 第30回学術大会, 2017.11.18, 大阪

(3) 野澤桂子, 藤間勝子: がん患者のアピアランスケアに関する医療者教育研修会の現状と課題について, *国立病院総合医学会*, 2017.11.11, 神奈川

(4) 野澤桂子: アピアランス支援の意義とエビデンス, 第13回日本乳がん看護研究会, 2017.10.21, 東京

(5) 野澤桂子: 大腸がん化学療法とアピアランスケア~患者の生きるを支援する~, 第55回日本癌治療学会学術集会, 2017.10.20, 横浜

(6) 野澤桂子: 「肺癌患者のアピアランスケア」忘れてませんか、栄養・リハビリ・外見の問題, *日本肺癌学会*, 2017.10.14, 横浜

(7) 野澤桂子: アピアランスケア-癌治療に伴う毛髪の変化と患者支援-, *日本化粧品学会*, 2017.10.12, 東京

(8) 野澤桂子: 看護師に求められるアピアランスケア, 第14回日本乳癌学会中部地方会, 2017.9.9, 飯田市

(9) 野澤桂子: 肺がん患者のアピアランスケアについて考える, 第106回日本肺癌学会関西支部学術集会, 2017.6.24, 大阪

(10) 藤間勝子, 野澤桂子: 手術により容貌変化した上顎洞悪性黒色腫患者に対するアピアランス支援の一例, 第22回日本緩和医療学会学術大会, 2017.6.24, 横浜

(11) 野澤桂子: 化粧・整容療法 認知症・老化による機能的・外見的变化への対応「癌治療に伴う外見の変化とアピアランスケア」, 第28回日本老年歯科医学会学術大会, 2017.6.15, 名古屋

H. 知的財産権の出願・登録状況 なし

厚生労働科学研究費補助金(厚生労働科学研究費がん対策推進総合事業)
がん患者に対するアピアランスケアの均てん化と指導者教育プログラムの構築に向けた研究
(H29-がん対策-一般-027) 代表者：野澤桂子
分担研究報告書

一般人を対象としたがん治療に伴う外見の変化と その対処に関する意識調査

分担研究者	藤間 勝子	国立がん研究センター中央病院アピアランス支援センター
研究協力者	野澤 桂子	国立がん研究センター中央病院 アピアランス支援室
	清水 千佳子	国立国際医療研究センター病院 乳腺腫瘍内科
	上坂 美花	患者代表： CheerWoman チアウーマン第 3 期、第 4 期事務局長
	改發 厚	患者代表： 精巣腫瘍患者友の会
	岸田 徹	患者代表： NPO 法人がんノート
	桜井 なおみ	患者代表： 一般社団法人 CSR プロジェクト
	山崎 多賀子	患者代表： NPO 法人がんリボンズ

本研究の目的は、がん治療に伴う外見変化へのケア（アピアランスケア）について、治療初期から行われる適切な情報提供やケアのあり方を検討するために、一般人が持つがん患者の外見変化や変化に伴う社会的困難、変化に対処するための情報・支援に関する意識について明らかにすることである。脱毛をはじめとしたがん治療に伴う外見の変化は、患者にとってがん罹患によって生じる、それまでに経験したことのない新たな問題である。本調査では、がんに罹患していない一般人を対象に調査を行うことで、患者が持っていると予想される、外見変化に対するベースラインとなる知識やイメージについての知見を得て、がん患者がアピアランスケアを必要としたときの意識や行動を予測することを可能にし、今後医療者が提供するアピアランスケアのコンテンツ作成の基礎として活用することを目指している。

調査は、Web 調査会社登録の日本国内に居住する 20～74 歳の 1000 名を対象に、Web 上での無記名自記式アンケートとして実施し、1030 名（男女各 515 名）から回答を得た。本研究の結果は、今後のアピアランス支援内容の検討する上での基礎資料となりうる貴重なデータである。調査結果については、今後詳細な分析を行い、学術集会および論文として公表する予定である。

A. 研究目的

がんに罹患したことのない一般人を対象に、がんによる外見変化についてどのような知識やイメージを持っているのかを意識調査を行う。がんに罹患以前の外見変化についての知識・イメージを明らかにすることで、実際にがんに伴う外見変化への対処が必要となった時の行動や必要な支援方法を予測することが可能になり、罹患初期の適切な情報提供に活かすことができる。

B. 研究方法

1. 研究デザイン 横断的観察研究

本研究では、インターネット調査を通じて、無記名自記式質問紙調査を実施した。

2. 対象

2.1. 適格基準

- (1) 国内に居住する20歳以上75歳未満の男女
- (2) がんに罹患した経験のない者
- (3) 本研究への参加同意が得られ、インターネットデバイスに関する操作に問題のない者

2.2. 除外基準

- (1) 現在または過去にがん治療に携わったことがある医療者や製薬会社の関係者

本調査に先立ち選定したインターネット調査会社に調査協力登録を行っているモニターを対象に、一般人の抽出を目的としたスクリーニング調査を、インターネットを通じて行った。スクリーニング調査では、上記の適格基準(1)-(3)に該当し、除外規準(1)に該当しない者を抽出した。

2.3. 対象者数

約1000名 (男女各500名)

2.4. 対象者数設定の根拠

結果の解析では性別・年代別の違いによる検討をするため、回答をグループ化して分析を行うことには約1,000件のデータを

必要とした。

3. 調査方法

3.1. 調査項目

- (1)がん治療による外見変化の認知 1項目
- (2)認知のきっかけとなった対象 2項目
- (3)がん患者の生活イメージ 10項目
- (4)外見に関する症状についての知識 23項目
- (5)外見以外の身体症状に関する知識 16項目
- (6)外見変化の対処に関する項目 2項目
- (7)変化に伴う生活変容に関する項目 30項目
- (8)外見変化の対処に利用する情報源に関する項目 24項目
- (9)外見変化の対処に利用する情報源の信頼度 23項目
- (10)がん患者が利用するウィッグ価格 1項目
- (11)自分が購入する場合のウィッグ価格 1項目
- (12)個人属性：がん罹患の有無・学歴・職業 5項目

性別、年齢、居住地については、インターネット調査会社に調査協力登録段階で確認しており、改めて調査はしなかった。

3.2. 手順

スクリーニング調査によって抽出された一般人に対して、インターネットを通じ、事前に設定した調査項目を一斉発信して回答を求めた。総回答時間は約10-15分程度と見積もった。

3.3. 調査期間

国立がん研究センター倫理審査委員会による研究許可日(平成30年2月21日)以後である、平成30年2月27日~3月3日の5日間に渡り、目標人数を満たすまで行った。

3.4. 倫理面への配慮

研究に際しては、国立がん研究センター研究倫理委員会の承認を得て実施された。本研究は匿名で実施され、対象者の氏名住

所などの個人情報扱わないものとする。

また、本研究における調査は、介入なしの観察研究であり、人を対象とする医学系研究に関する倫理指針に則れば必ずしもインフォームド・コンセントは必要ではない。しかし、改訂個人情報保護法への対応として、以下の手続きをもって調査の趣旨説明と同意取得を行った。

本研究の調査実施に先立ち、対象者がアクセスした最初の画面に研究趣旨説明書を提示して説明を行った。画面には、目的、方法、予想される利益と副作用、プライバシーの保護、研究への参加が自由意思によるものであること等を説明し、回答した内容が研究者に研究目的で譲渡されることを明記した。その上で、解答画面の最初にチェックボックスを作り、そこにチェックをすることで対象者の同意を得た。

4. 解析方法

主要な統計学的考察を行う計画とした。まずは各変数の度数分布、記述統計の算出を行い、その後、対象者の個人特性(個人属性)や外見変化についての知識、情報獲得の状況、対処方法について統計的解析(相関係数の算出、T検定、分散分析等)を行う予定である。

C. 研究結果

1. 回答数

男女各515名、計1030名からの回答を得た。回答者の属性は図1(P32)の通りである。

2. 結果

現在まで以下の結果を得ている。

2.1. がんによる外見変化の認知について

がんの治療によって外見が変化した人を見たことがある割合(「はい」の割合)は全体の49.2%であった。性別では男性が45.2%、女性が53.2%であった。性別×年代別の階層では、「見たことがある」割合が最も高いのが女性の20代62.1%であり、最も低いのが男性の20代33.0%であった。

2.2. 外見変化認知のきっかけ

外見変化を見たことがあると答えた人に、

それはどのような関係の人であったかを尋ねたところ、全体では「家族」36.1%、「TVなどメディアで見る芸能人・スポーツ選手」33.7%、「親戚」25.2%、「友人・知人」21.1%、「職場の人や仕事先の知り合い」20.7%、「近所の人」13.4%であった。

2.3. がん患者におこる外見変化の認知

「髪の毛やひげ、体毛」の変化が生じると回答した人は、全体の95.2%であり、「顔や身体の肌」84.0%、「手足の爪」は70.2%であった。実際に身近な人で外見変化を見たことのある人では、「髪の毛やひげ、体毛」96.8%、「顔や身体の肌」91.4%、「手足の爪」77.3%であった。メディア等であると答えた人では「髪の毛やひげ、体毛」98.7%、「顔や身体の肌」92.1%、「手足の爪」81.6%であった。実際に外見変化を見たことがない人では、「髪の毛やひげ、体毛」93.5%、「顔や身体の肌」76.7%、「手足の爪」62.7%であった。

2.4. 詳細な外見変化の認知

「ほとんど全ての患者が経験する」外見変化として回答された項目は、「血色が悪くなる」58.2%「頭髪の脱毛」56.8%「痩せて体型が変わる」53.8%が上位であった。

一方、「経験する患者はほとんどいないと思う」が選択された項目の上位は、「太って体型が変わる」30.2%、「爪がとれる」25.6%、「おなかにストーマをつける」17.6%であった。

2.5. 外見変化以外の身体症状

「ほとんど全て(70%以上)の患者が体験する」外見以外の身体症状として回答された項目は、「だるさ」78.1%「気持ちの落ち込みや意欲の低下」70.0%「痛み」69.6%が上位であった。

一方「経験する患者はほとんどいない(5%未満)と思う」が選択されて項目では「嗅覚の変化」9.4%、「皮膚のかゆみやただれ」7.6%、「口内炎」6.8%が上位であった。

2.6. 具体的な外見変化への対処方法

問いに対し「そう思う」と回答した比率が

高い項目は、「治療中は敏感肌や低刺激用のスキンケア製品を使った方がよい」61.8%、「治療中や再発毛後はパーマやヘアカラーをしない方がよい」59.2%、「がんによる外見変化については、病院で対処方法の説明がある」55.1%であった。

一方で「そう思う」と回答した比率が低い項目は、「脱毛剤や育毛剤、頭皮マッサージをするなどして、脱毛の予防や再発毛の促進に努める方がよい」23.0%「治療中はメイクアップ（化粧）をしない方がよい」30.2%、「脱毛した人は医療用のウイッグ（かつら）であった。

2.7. 自分に外見変化が生じたと仮定した場合の行動変容

設問に対し「そう思う」を選択した割合の多い項目は、「外出や人と会うのがおっくうになる」39.6%、「仕事や学校を、辞めたり休んだりしなければならぬ」37.4%、「治療中は副作用で体調が悪く、外見変化があっても、外見や自分の恰好に気を使う余裕はない」25.4%であった。

一方、設問に対し「そうは思わない」を選択した割合が多い項目は、「外見が変わっても気にしないと思う」31.9%、「脱毛したり外見が変わったりするならば、抗がん剤治療はしたくない」15.5%、「外見が変わったことでは日常生活に変化はない」14.7%であった。

2.8. 外見変化の対処に利用するだろうと思う情報源

外見変化の情報のリソースとして実際に利用するだろうと思う項目としては、75.9%の人が「医療者」を選択しており、次いで「同じ病気の個人で発信するインターネット上の情報」43.3%、「患者会など患者支援団体が発信するインターネット上の情報」42.5%であり、「家族」42.2%、「同じ病気の友人・知人」40.5%よりも多かった。

一方、利用するとの回答が少なかった項目は、「ネイリスト」0.8%、「エステティシャン」1.2%、「化粧品販売店の販売員」2.3%であった。

2.9. 情報源の信頼度

外見変化の情報のリソースとして「非常に信頼できる」として選択された項目は、「医療者」89.8%、「同じ病気の友人・知人」89.3%、「患者会など患者支援団体の人」83.8%に続き、「患者会など患者支援団体が発信するインターネット上の情報」82.2%、「同じ病気の個人で発信するインターネット上の情報」81.5%が上位であった。

一方「全く信頼できない」として選択された項目は、「エステティシャン」22.9%、「ネイリスト」20.8%、「化粧品販売店の販売員」18.3%であった。

D. 考察

本研究からがん罹患したことのない一般人においては、がん患者の外見変化の認知の体験として、家族に次いでメディアも影響しており、がんの外見変化を知る率が多いことが示された。また、実際にがんにより外見変化をした人を見る経験の有無にかかわらず、「髪の毛や体毛、ひげ」に変化が生じると答える人が9割以上おり、認知が高い。

また、がんによる外見変化以外の副作用として、痛みよりもだるさや気分の落ち込み・意欲低下が上位を占めており、活動性の低下に影響する要因に対する認知が高かった。

生活に対する影響では、がん治療により外見が変化することにより、仕事や学校などの社会生活や日常生活に影響がでると考えている人、自分が気にするだろうと考えている人も3割以上いることが示され、外見変化が療養中の生活に影響を与えると考えていることが示された。

実際に外見変化した際に利用する情報リソースとしては、医療者が利用・信頼度共に高いものの、同じ病気の経験を持つ個人や団体が発信するインターネット情報も極めて高い比率で利用・信頼されていることが示された。

以上の結果については、インターネット調査会社のモニター登録者を母集団としており、バイアスは否めないものの、一般人の

がん治療に伴う外見変換に対する意識について一定の知見が得られたと考える。

今後、より子細に内容を分析し、医療者に向けたアピランスケアの研修プログラムに反映させていく予定である。

E．結論

今後の分析の中で検討する。

F．健康危険情報

特記すべきことなし。

G．研究発表

1．論文発表

(1) Keiko Nozawa , Makiko Tomita , Eriko Takahashi , Shoko Toma , Yasuaki Arai , Miyako Takahashi : Distress from changes in physical

appearance and support through information provision in male cancer patients , Jpn J Clin Oncol , 1 - 8 , 2017 , [Epub ahead of print]

(2) 藤間勝子：がん患者に対するアピランスケアの意義（解説），血液内科 74巻4号，551 - 556，2017

2．学会発表

(1) 野澤桂子 , 藤間勝子 : がん患者のアピランスケアに関する医療者教育研修会の現状と課題について , 国立病院総合医学会 , 2017.11.11 , 神奈川

(2) 藤間勝子 , 野澤桂子 : 手術により容貌変化した上顎洞悪性黒色腫患者に対するアピランス支援の一例 , 第 22 回日本緩和医療学会学術大会 , 2017.6.24 , 横浜

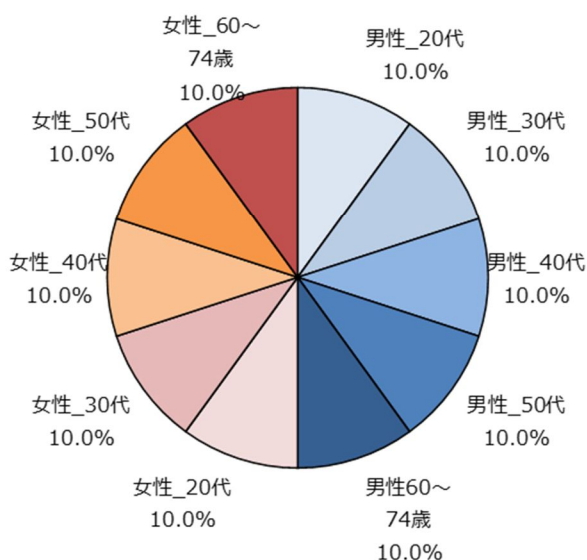
H．知的財産権の出願・登録状況

特記すべきことなし。

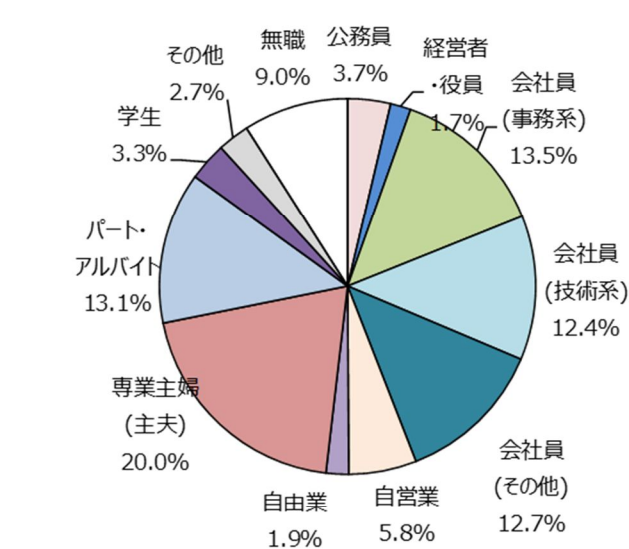
回答者属性 <健常者> (n=1,030)

図 1：健常者層全体の回答者属性

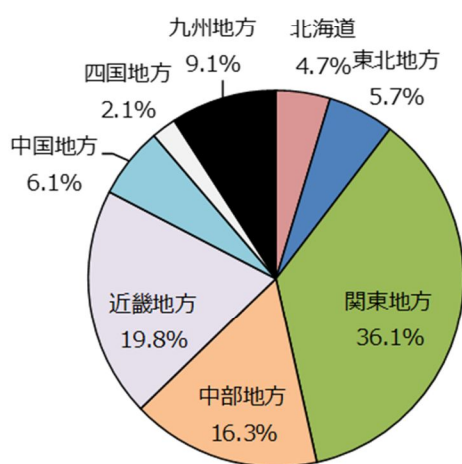
性年代別



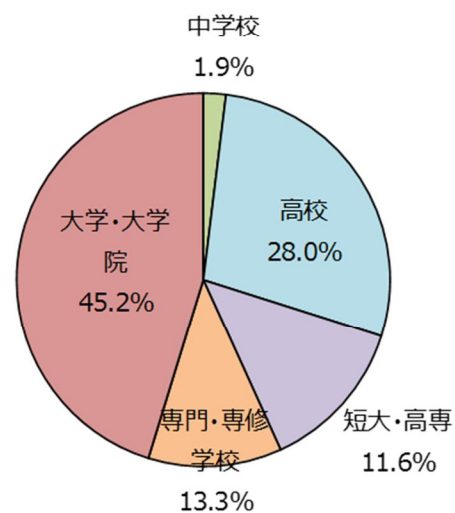
職業



居住地域



最終学歴



研究成果の刊行に関する一覧表

書籍（日本語）

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の編集者名	書籍名	出版社名	出版地	出版年	ページ
野澤桂子 山崎直也	がん治療に伴う 外見の変化	門脇 孝 小室一成 宮地良樹	診療ガイドラ インUP-TO- DATE	小学館	東京	2017	994 - 999
野澤桂子 皆藤 章	がん治療を受け るひとと社会を つなぐケアの本 質	皆藤 章	いのちを巡る 臨床：生と死 のあわいに生 きる臨床の叢 智（京大心理 臨床シリーズ 12）	創元社	大阪	2017	204 - 235
野澤桂子	アピアランスケ ア 脱毛時のケ アとメイクにつ いて	矢形 寛 阿部恭子	乳がん患者ケ ア パーフェ クトブック	学研	東京	2017	216 - 222
野澤桂子	第 章副作用症 状別プロのコツ 8 皮膚 脱毛～乳房切除 と並ぶ患者の苦 痛に対して、その プロセスに応じ た支援が大切～	増田慎三	乳がん 薬物 療法副作用マ ネジメント	メジカル ビュー社	東京	2017	264 - 266
野澤桂子	第5章 女性がん患者支 援のためのチー ムアプローチ 5.「外見」	佐治重衛 清水千佳子	チームで学ぶ 女性がん患者 のためのホル モンマネジメ ント	篠原出版 新社	東京	2017	277 - 280
野澤桂子	第1章 アピアラ ンスケアに必要 な基礎知識 1 .アピアランス ケアとは	野澤桂子 藤間勝子	臨床で活かす がん患者のア ピアランスケ ア	南山堂	東京	2017	2 - 19
	第2章 身体症状 別 アピアラン スケア 2)頭髪の変化に 対するケアとカ モフラージュ法 4)毛髪の変化に 関する患者から の質問						56 - 68 81 - 92

	第3章 事例からみるアピアランスケア 7) 外見の変化に関する訴えが心理的理由に起因した事例						243 - 246
	第4章 アピアランスケアの実践に向けて 1. 美容専門家・企業との連携						252 - 256
井田英恵 清水千佳子	第1章 アピアランスケアに必要な基礎知識 2. がんの治療とそれに伴う外見の変化 1) 薬物療法	野澤桂子 藤間勝子	臨床で活かすがん患者のアピアランスケア	南山堂	東京	2017	20 - 32
菊地克子	第2章 身体症状別 アピアランスケア 2. 皮膚症状 1) がん治療に伴う皮膚障害とは 2) 色素異常	野澤桂子 藤間勝子	臨床で活かすがん患者のアピアランスケア	南山堂	東京	2017	97 - 103
全田貞幹	-A-4 支持療法	日本頭頸部癌学会	頭頸部癌診療ガイドライン 2018年版 第3版	金原出版	東京	2017	16 - 20
全田貞幹	第2章 身体症状別 アピアランスケア 2. 皮膚症状 6) 放射線治療による皮膚障害	野澤桂子 藤間勝子	臨床で活かすがん患者のアピアランスケア	南山堂	東京	2017	134 - 138
藤間勝子	第2章 身体症状別 アピアランスケア 1. 毛髪の変化 3) 眉毛・まつ毛の脱毛に対するカモフラージュ法 2. 皮膚症状 7) 日常整容のスキンケア、8) 皮膚症状に対するカモフラージュ法	野澤桂子 藤間勝子	臨床で活かすがん患者のアピアランスケア	南山堂	東京	2017	70 - 76 139 - 153

	9) 皮膚症状に関する患者からの質問					158 - 162
	3. 爪の症状					
	2) 爪の変化・変色、3) 爪の変化に関する患者からの質問					173 - 188
	4. 外科手術後の変化					
	1) 手術の癒痕など					191 - 195
	第3章 事例からみるアピアランスケア					
	8) ストレス緩和とコミュニケーションの活性化のためにアピアランスケアを用いた事例					247 - 250
	第4章 アピアランスケアの実践に向けて					
	2. 施設内でのアピアランス支援体制の構築					257 - 260

雑誌（外国語）

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
Keiko Nozawa Makiko Tomita Eriko Takahashi Shoko Toma Yasuaki Arai Miyako Takahashi	Distress from changes in physical appearance and support through information provision in male cancer patients	Jpn J Clin Oncol	[Epub ahead of print]	1 - 8	2017

雑誌（日本語）

発表者氏名	論文タイトル名	発表誌名	巻号	ページ	出版年
野澤桂子	医療者が行うがん患者の外見支援の意義	日本皮膚免疫アレルギー学会雑誌	12(1)	1 - 8	2017
菊地克子	皮膚の健康科学最前線 皮膚科における化粧品の役割	日本化粧品学会誌	41巻4号	282 - 285	2017

菊地克子	機能からみた外来患者へのスキンケア指導 化学療法による副作用を減らすスキンケア、生活指導	Derma	259号	22 - 50	2017
全田貞幹	特集 / 頭頸部悪性腫瘍の疑問に答える	JOHNS (Journal of Otolaryngology, Head and Neck Surgery)	33巻9号	1264	2017
藤間勝子	がん患者に対するアピアランスケアの意義(解説)	血液内科	74巻4号	551 - 556	2017
飯野京子 嶋津多恵子 他	全著がん治療を受ける患者への外見変化に対するケア がん専門病院の看護師へのフォーカス・グループインタビューから	Palliative Care Research	12巻3号	709 - 715	2017
飯野京子 長岡波子 他	看護職員の教育上の課題と課題解決のために活用したい院外研修への期待 政策医療を担う医療機関の看護部長の認識	国立病院看護研究学会誌	13巻1号	55 - 65	2017
小澤三枝子 飯野京子 他	看護師長を対象とした継続教育プログラムの検討 政策医療を担う病院に勤務する看護師長の教育ニーズ・学習ニーズ調査から	国立病院看護研究学会誌	13巻1号	10 - 17	2017
亀岡智美 飯野京子 他	看護部教育委員の学習ニーズと特性の関係 政策医療を担う医療機関を対象にして	国立病院看護研究学会誌	13巻1号	2 - 9	2017
村上真基 飯野京子 他	緩和ケア病棟を併設している療養病棟における緩和ケアに対する意識調査 緩和ケア病棟スタッフと療養病棟スタッフへの意識調査	Palliative Care Research	12巻3号	285 - 295	2017